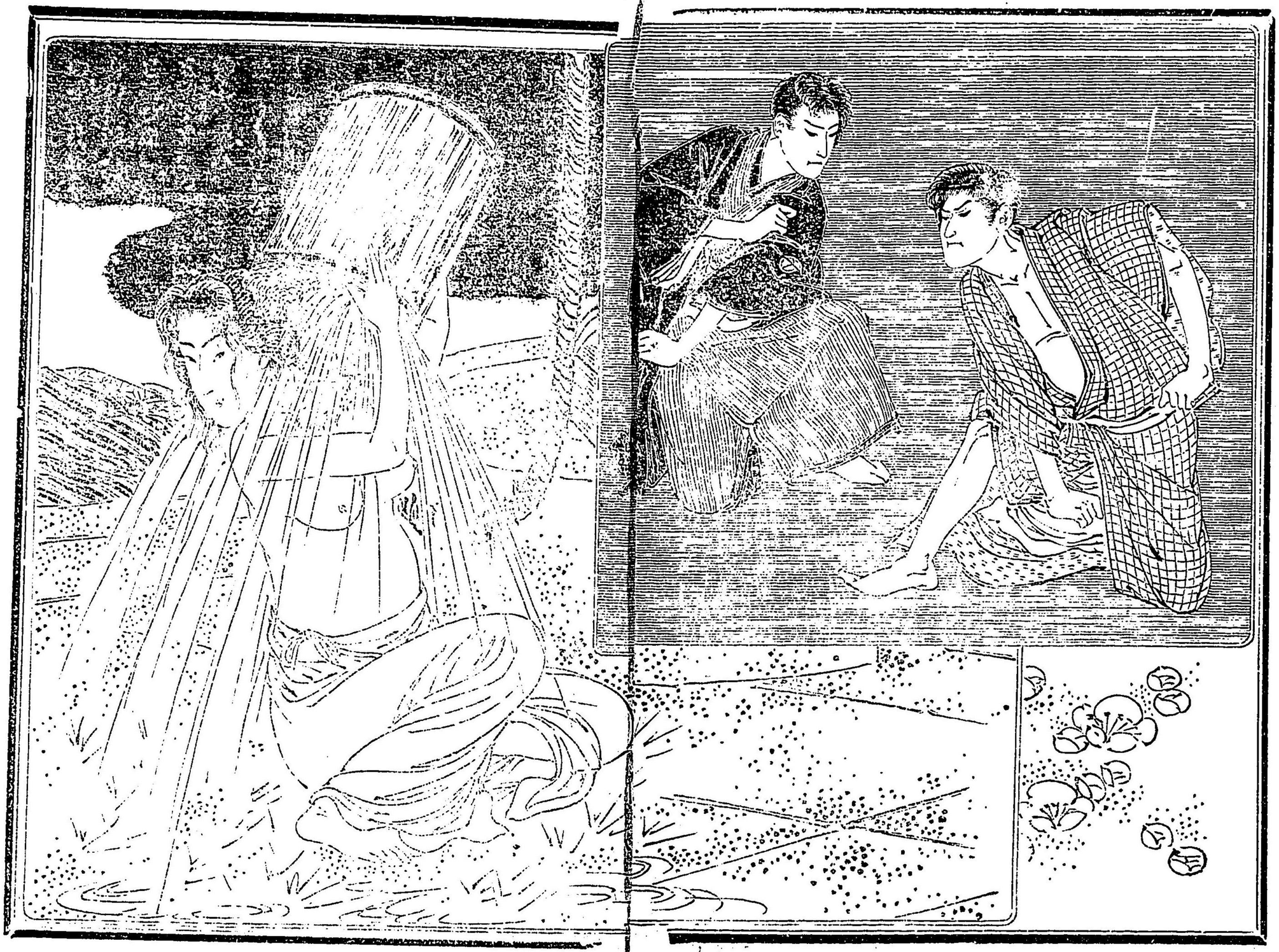
鑑手子孝草
4931
特 10
302
梓堂吉日

善惡草孝子手鑑序

曉霧は已わ晴れ日光蒼空に輝き嫩葉は緣を添へ百鳥歡を告げ戸々炊烟起り四望爽快なり人車の閙々たるは事務ある人の忙はゝきを知らせ走者の先きを爭ふ新聞郵便の亂雜にはして當日吾人の事業を促がすが如し是れ早朝の景色にして人々之を以て愉快と思はざるはなく其氣も亦新鮮快樂あり所氣合ふして終日各其業を勵まず萬事好き都合あるは萬々疑ひなし而るに人の捨物もなく外物わ侵さるゝ儘に此新鮮の氣を轉じ今日は好き日和なり曳陀に舟行せん明日も亦好からん南濱わ釣魚せんと徒らに消日の計のみをなさば折角當日の幸福を益に棄つるものわて終に不幸を來すことあり故に人々は早朝の新鮮快樂の氣を吸て一心不亂に當日の家事を執り一年三百六十日此氣を失はざれば身を立て家を興し他人の恭敬を受ることを待るは必定なりろれ然り兒童の精神は恰も早朝新鮮快樂の氣の如くなれば其未だ品性を汚壞せられざ尙純粹無滓なる時に當て能く注意せざれば後ち悔ふとも及ぶ可からざる不幸を招くべし因て聊か老婆心を述んとす

于時明治二十三年極月下旬

菅の屋主人識



特10
302

○善惡草孝子手鑑

第一章

人の心の同じからざる其面の異なる如く父子兄弟の親しきも闇魔の聽ふありといふ彼浄瑠理の明鏡に照して見れば善惡邪正爭でか容易く知るを得ん慈恭淑の兄に福藏ありお舟の頑父に頓兵衛ありて茲よ四人の兄弟が合せ鏡に映るてふ孝貞節義柳惡非道善と惡との心の妍醜明かまに〳〵書綴る事の起源を尋ぬるふ幕府未だ盛んの頃播州明石の城主と聞ゆし松平播磨の守の藩士にて留守居役を勤むる五十嵐右膳といへる者あり扨身江戸詰ふて妻をふゆをと呼ひ夫婦の中ふ男女四人の子ありて長男善太郎(二十八)次男良之助(二十六)長女ふ糸(二十三)末子の娘お政といふは事故ありて産れ落るとろのまゝ庭の上より或力へ養女に遣し殘る三人の子供をばいと愛しみ養育るうち移れば變る明治の聖代廢藩置縣の令出し昔時に變る時勢となり明治六年の頃とかよ奉還金を携て舊藩主の領地なる播州明石へ移住み同所の仲町よ呉服商を開店し大坂地方は言に及ず九州路へもいと手廣く營業ふして居たりしも俗にいふ士族の商法手馴ぬゆへに損毛多く利益か資本まで喰込中ふて長男の善太郎は色に耽り酒ふ溺て親の金を已い勝手

に持出し娼妓を買ひ藝妓に馴村み親の異見も糠に釘日増に募る放蕩懶怠商用の爲め父の代理ゐ大坂地方へ赴むきて同地にしばし滯在中頁からぬ友に誘引はれ朝ゐ松島の花ゐ戯ふれ夕に堀江の柳を攀ぢ商法向は捨ゐきて放蕩の爲に國元より齎らし來りし二千餘圓の金は忽まち水の泡消て跡ゐき夢の間に遣ひ捨ても飽足らぎ奸智に長たる善太郎かゝる時の用心にと密かに父の實印を盜み取て持參せしを是幸はひと取引先より父の實印を證據として巨額の金を借入つ豫て難波新地の貸席田中屋にて馴染を重ねし同所の藝妓三春屋小柳を二百三十圓ゐて根引なし東區谷町の片傍に小意氣な家を購なひ求め夫婦とおりて睦ましく今日は花見明日は演劇と男女齋しく衣飾りて贅澤遊びゐ浮和〳〵と坐して食へば山も空しく限ゐるの金限ゐき遊興の費用を爭でか永く支得ん懷中淋しくおるに付け今の内濕手で栗の一ト儲けと堂島の米相場ゐ掛り遣ひ殘りの金を以て買ば下り賣ば上る寄附から大引までとん〳〵柏子に仕合わるく日ゐ增し嵩む不義理な借財果は家居も債主へ抵當に取られて行詰り首も廻らぬ苦しき中で弱り目に祟り目とやら小柳は元是路傍の聖絲人に手折れ人ゐ攀られ情を閣きし者あれば多年の梅毒一時ゐ發し面部は素より手足まで桃色ゐ腫上り膿汁流れて其臭氣宛から腸樽を覆せし如くどつと床に就たるまゝ起臥さへも自由ゐならず最初の程は善太郎も

醫師ゐ藥餌と手を盡し種々に勞はり介抱したれと藥餌の効驗は更ゐなく次第ゐ重る難症ゐ眼凹み頰骨顯はれ咽喉の腫物は腐亂して滴たる血膿は泉の如く仰臥圓迄腐れつゝ穢さ臭さ堪がたく卒塔婆小町の夫ならで多の男を惱殺したるその罪科の報ひ來て世ゐ淺ましき風姿となりしを見るに付け聞くゐ付け素より浮薄の善太郎いつか心に愛想を盡しどうがなして追拂んと種々に工風ゐ凝し紀まち一つの惡策を考がへ出して有一日の事小柳に向ひていと優しく「今日は心地は如何にぞや當人の事を思ひの外ゐひ〳〵重る其許の病氣心の限り看護たる醫藥の効驗なきものから二世と嘗ひし其許の身に萬一の事のあつた日は如何に侮しき限なり此に付ては豫てより名醫の聞いや高き松山先生が院長なる中の島の病院へ入院させて入費を出まぢ手の屆くだけ精一杯治療せかと思ふなりとホロリと落す空涙猫撫聲を濕ませて賜しかくれば小柳は只感手を合てせき來る嬉し涙を呑込つ情夫の實意を伏拜み一も二もなく歡こびて少しも迅く入院させてと言に默頭く善太郎仕濟したりと思ふ心を色にも見せぢ夫々の準備を整のへ小柳をば中の島の病院へ投込む如く入院させ是で邪魔を拂ひ徐しと一人ほく〳〵喜びつ家財諸道具は言も更なり小柳が所持の手道具より衣類等をも一つ殘さずその向々へ賣代なし家屋も既ゐ或方へ抵當ゐ入てあるを押かくして膽太くも或金貸を欺むきて二重抵當に旨く

はめ込み惣計四百圓餘の大金を攫みしまゝに造化精妙と喜こび勇み夜ゑ紛れ跡は野とあれ山の奥川があるおら尋ねて厶れ家のおいのも酒落たものと尻に帆掛て隆德寺程遠からぬ兵庫縣下和田ケ崎に流れ來り土地定めず彷徨非き良からぬ友と交はりて先途に懲す金ある中は色ゑ耽り酒に溺れさだ夫のみか親の目の變化も迅ぎ一六勝負袁彦道の群に入り遊び暮して居るうちゑ素より悪錢身に付ず嚢り空しくおるに付け果は群の場所に入り人の懐中腰の物を掠めて飛去る書鳶い危ゝき橋を渡りつゝ巾着切と成の果次第ゑ悪業增長し心のまゝに舉動ける箇は是善太郎の父五十嵐右膳が播州明石ゑて商法を開業せし明治六年より同九年に跨がゑ其の間ゑの物語なり話頭兩分單表五十嵐右膳は四千圓餘の金を資本ゑ代物を仕入れ最とも立派ゑ開店したるゑの甲斐もおく日ゑ月に打續きたる損耗も捗おからざるその中ゑて襲ゑ大坂に代替として出し遣たる善太郎の行衛もしれずおりたる末大坂地方の取引先より我賣印を證據とシて踏耳ゑ水の嚴しき催促借金したる覺なしと辨解おせど聞ぬ借主終に裁判沙汰とおりたるが何をいふゑも賣印が證據とおりて言分立ず皆負公事とおりたるより一錢だゑ使用せぬ負債の爲に家屋は素より何も彼も人手に渡し昨日の餘裕ゑ引換て今日の活計も立兼る現ゑ定めおき有異轉辨盛衰榮枯地を變て又よき工夫もおきものから少しの知巳を傾りつゝ家族

を纏めて明石を立退き是も同じく兵庫縣下和田ケ崎へ移り住み同じ土地に親と子が流涙居ると夢知らす心の限り善太郎の踪蹟を嚴しく尋ねたれど絶て所在は知れざりけり

第二章

落魄て袖ゑ涙のかゝる時人の心の身ぞ知らるゝト昔の人の詠たる歌も今は我身に振かゝる難義ゑ難義の重なりて落魄果し身の上を嘲つ涙の遣瀬おく夫や是やの心配に右膳は痛く肺を勞らし枕らも上らぬ大病に妻のお直は言に及ばず次男良助妹お糸は兄善太郎に似もやらで何れ劣らぬ孝貞節義世に有難き兄妹なれば父の看護ゑ罪食を忘るゝまでに右左枕の邊ゑ附添て撫ゝ摩りつ醫師よ藥餌と粉骨碎身心の限り介抱怠たりわらざれどいつ愈べき体もなく斯る中にて妻のお直も年頃の心勞ゑ搗て加へて此程より杖枕とも頼みてし本夫が長の看病疲勞一時ゑ發して是もまた枕を併べて臥たる父と母とか危篤の病氣偏は何とせん悲しやと兄妹連個は途方ゑ暮れ何とせん術泣ゑも泣かれず親子四人かく迄ゑ落魄果しろの上に父母の此病氣名醫を迎へ良藥を調のへ來りて思ふがまゝゑ御介抱申したけれど先立つものは金の工夫何を言ゑも今の貧苦是も畢竟兄一人の不所存より起りし事吾々は兎も角も大恩受し親の身にかゝる憂目を掛まゐらす勿

休なくも淺ましき兄の心ぞ怨めしけれと額を集めて兄妹が返らぬ事を語り出で袂噛しめ拳を握り泣じとすれど生憎ふ堪ぬ口惜さ村時雨濡ずは涙の谷なりき斯ては果じと良助は弱る心を勵まして妹ふ糸ふ父母の看護を委ねて力より人力車を借來りその身は車夫と成下り仕つはぬ業も親の爲めと朝は星と戴だきて暗き中より稼業に出で車を挽て西東南に馳せ北よ走り深夜ふ戻れど我身の勞れは更ふ厭ふ氣色なく父母の病苦を慰さめんと走廻覽ぜよ此通り造化よくて今日はまた能い客を乘て思はぬ稼ぎ箇樣よ設けて參りましたと財布の中より取出す十錢紙幣を五十錢と偽はり見するも安堵させんと親を慰さむ一時の方便孝子の心ぞ哀れふる此行爲を見る人聞人いつれも感歎せざるはなく誰いふとなく孝行車夫と言るゝ程ふ成りしとぞ妹のお糸も兄良助ふ優り劣らぬ心操父母の病ふ懼りし日より貝の一夜も衣帶を解き眠よ就しとはなく看病の餘暇には少しは活計の手助ぶ爲緒を縫ひ或はまた蠟燭の芯を捻り較弱き女子の手内職娘盛りの年頃なれど形にも貌ふも更に構はず兄と芯を一つふし一生懸命稼げど去らぬ窮鬼神父母の病氣に藥餌土瓶も煎じつめたる痩世帶麻餌の代價家の活計不足に不足をかさね衣の一枚二枚と我が衣類をぬきては賣りく〳〵ては喰ひ自分達は三度の食事を二度にへらして父母には好める物を買與へ殘る隈なき兄妹が孝養深きを皇天も少は憐れみたまひし

か母の病氣は日ふまして稍快力に赴むくものから父の病氣は日に月ふます〳〵重りて今は、や醫師も匙を思按おげ首頼み少なき容体に豫て覺悟はしながらも兄妹の嘆き一方あら古此上は神佛の冥助を願る外ふしと程遠からぬ湊川の楠公神社ふ願掛を掛けお糸は夜ふ入り冥助が稼業を果て歸るとそのまゝ深更も厭はず入違ひ雨風の嫌ひなく夜毎〳〵の參詣跣參り手弱き踵先蹠重い石よ躓づき生爪をはがして流るゝ唐紅なひ痛さも一念他目も振らず祈りける其とも知らぬ善太郎はます〳〵善からぬ業に耽終ふ惡賊の群に入りふひ〳〵惡事の太るふ付け次第よ細る首筋にかゝる縄うつしかに廻り來るともしるやしらずや頃は明治の九年七月十二日楠公神社の大祭ふて近鄕近在の遠近より詣來る人々老若男女蟻の甘さに付く如く水の低きふ流るゝに似て肩擦轂擊押合ひへし合ふ群集ふ紛れ善太郎以前の姿ふ引換て飛白の廣袖三尺帶晒しの手拭肩ふ掛け脇寛ろげし腿棍紛体きよろつく眼人を射りやづふ仕事を見付んと西南北と彷徨ひたれど思ひし程の獲物もなく其夜も更て十二時過ぎ群集の人も思ひ〳〵家路をさして四離八散立原る跡は寂寞ど畫の炎熱を吹拂ふ庭の松風音凄ていとゞ涼しき夏の夜の月は樹間ふ葉隠て朧朦に照ゝ境内に絶て人氣も無なりければ忌々しいと獨語ち舌皷鳴し善太郎

己が巣窟へ歸らんと立去る折から社の際ふて摺違ふたる一個の小女月の光にろの顔を透して見れば思ひきや擬ふかふ妹のお糸どうして此邊に居るやらん殊ふ衣類も垢染て而窶れたる優苦の体要こそあらめと掘り默頭きコヤ喃お糸と呼止められ互ふ見合す顔と顔お前は兄さん也許は妹どうして此邊にお前もどうして此邊ふと別れ程經し兄弟が思掛おき再會に何から先へ話さうやら娘心ふはろ〳〵とはや涙ぐむ夏の天善太郎は面目おげふお糸の脊を撫摩りふ圖した心の狂ひより親兄弟を打棄て良からぬ事を仕盡した果は坂地を逃亡なし行衛定めず處々方々流涙ひ歩きし不孝の天罰かゝる狀態ふ落魄はて悔の八千度百千度腕を嚙ども奈麻與美の甲斐なきが身ふ愛想が盡きいつろの事淵川へ身を投て死なうかと思ひつめたも幾遍か我と心を取直し何まれ一つの功を立て不孝のお詫をせんものと慥からぬ命長生て今日まで嗚呼〳〵生恥を晒すといふも身から出た錆今一度父母はじめ兄弟ふ時て逢たさ面見たさ神に佛ふ祈願を籠め今夜も是ある楠公神社へ參詣しはて〻歸り掛爰で其許と鬪らずもめぐり合しは楠公のお引合せに疑がひおふし何は鬼もおれ同胞の盡ぬ因緣ぞ嬉しけれ吾儕の上はゆる〳〵と追々語り聞すべし先づ差當りて問たきは父さまも母さまも打揃ふて變事なきや良助は壯健でか又一つには今も倘明石に居るとのみ思ひの外其許が此邊に居るといふは心得がたき不

審の第一夫のみならで其許の風姿顔も窶れ手足も細り衣服さへふ垢染て見すぼらしきろの有樣定めて深き仔細おらんに語り聞せてくれよかし以前の罪を購なふため身を粉ふ碎き命を捨ても力にならんと肝向ふ心の限り說盡す貞實面ふ顯はれて涙ながらに演るを聞きお糸は嬉しく又悲しく便おき身ふ便を得ついと慕母しき兄の詞ふ力を得て云々と親子四人明石を立退き和田ヶ崎に詣住居貧苦の中ふて父母が療しく病ふ臥したるより兄良助と心を惱せ活計を助け兩親の病氣ふ爭で平愈てと楠公樣へ願を掛け毎夜斯して參詣しまする〻詞短簡ふ一伍一什を涙と俱に物語るかゝる哀情を聞からに善太郎はいとゞ倘慙愧後悔措よしもなく言んとしては口籠る苦しき胸をむししづめ。何は兎あれ爰は往來まだろの外に問たき事相談たき仔細もあれば此方へ來よトお糸の手を引き表町の怪げふる小料理屋の門を叩けば應と答へて起出るこの家の主人は據てより善太郎の知己と見えやがて門の戸引明つサア〳〵此方へと迎ゆれば善太郎はお糸と俱に小座敷ふ打通り酒肴を誂らへてお糸ふ勸めろの身も喫べ飲ども醉はぬ無量の苦悩溜息つく〳〵お糸に向ひ今更聞て驚ろき入たる其許達兩個が親への孝行夫に引かへ面目も泣ふ泣れぬ此身の放蕩餌に鳴く鳥の巣立せず片羽ふる子は可愛さも八しほに增すと鄙語よいふは實か飽までふ慈愛くしませたまふなる父母のおん嘆き病煩らはせたまふま

で深く苦勞を掛まいらせし不孝ゐ不孝の重ゐる罪科今は我身に我ゐがら愛想もころも盡果たり何面目に長生へん生てゐめ〳〵生恥を晒さんよりは寧ろの事死んでゐ詫をしやうより外に詮なき此身の果我が亡後ゐ云々と父母はじめ良助ゐも後悔ゐして自殺せしと其詞から傳へて呉よかし妹さらばと言捨て傍ふありあふ火箸を取り咽喉に突立て死なんとす見るよりゐ糸はアヲヤとばかり驚ろき周章てゐし止め夫はどまでゐ心を改められた上からは死ゐうゐどゝの短氣を止め私し等達に力を添共に孝行ゐされたなら此ゑ上超すとはなしと引止られて善太郎。夫は其許が言迄もゐく三人俱々力を協せ十分孝行もつくしたけれど以前の身持がわるいゆゑ血を分た現在の同胞ゐりとて信用されじと思ひ迫りてこの自殺止めるは却つて情ゐし其處放してと引止るゐ糸の手先を振拂ひ死ゐうと狂ふ兄へ危急ゐ糸も今は一生懸命力の限りろの手を押へ涙ゐがらのゐろ〳〵聲。死ゐうと迄に実詰しろのゐ心を見る上は何で深く疑がひませう短氣を止て姿くしのゐ話し申すを一通りゐ聞ゐされて下さりませ父さんの御病氣は容易ゐらざる御容体このまゝゐ捨おく時はゐ命の程も覺束ゐしト言て十分介抱申したけれど貧しき活計ゐ醫師のゐ謝義藥餌の代料先立つゐ金の乏しければ焦思つばかりで詮術なしいつろ此身を娼妓に賣身代金もて良醫をむかへ價を厭はず良きゐ藥をゐ進め申した

事ならばゐ全快もあらんかと先頃中より兄さん（良助を指ていふ）ゐ度々ゐ咄し申しても如何ゐ親の爲なればとて天ゐも地にも只一人の妹を苦海に沈ては兄の義務を欠くのみか父母が聞かれたなら嘸ゐ歎きなさるであらう金の工面は此兄が頓てどうとかする程にマア落付て居たがよいとアノ物堅い兄さんゆと幾干ゐ勸め申してもゐ聞入のなきに詮方なく今日まで默止てをりまシが親のため其娘が苦海に沈むは往々ある習ひ假令如何なる苦辛も厭ふ心はありませぬ爰で貴郎ゑ逢ふこそ幸はひどうぞ此身を娼妓に賣りそのゐ金にて父さんの病氣を快すよい工夫を頼むは兄さん只一人と跡言さして口籠る娘心の一筋に思ひ込たる胸の中うち明け語る孝女の眞情腕拱ぬきて默然と始終を聞居し善太郎思はず片頬ゐ微笑しが氣取れまじと忽然ゐ又愁然として言るやう天晴見あげた孝行者アノ良助の物堅き律義も時に依るものぞ身を賣んとまで覺悟せし其許が身心を反古にはせじ辛い勤めも少しのうち此兄が死んだ氣で身を粉ゐ碎き稼ぎし上金調のへて遠からず廢業させて兄妹三人父母を慰さめ慰さめられ今の辛苦を昔話し花咲く春を樂しみゐ辛抱してくれ妹ト語るゐ聞ゐ兄妹がしめり勝ゐる四つの袖善太郎は詞を繼ぎ再たびゐ糸に打向ひ若ゐ此事を良助が聞たらんには彼是と故障を言んゐ測られず善は急げと世の俚語父の病氣ゐ猶豫ゐらず今夜家に戻るとゐ父母はじめ良助にゐ我

に逢たことは素よりかゝる相談せしとは深く秘して必らず素振にお覺られろ只娼妓の鑑札を願ふには戸主の實印が入用なれゞ父の實印を密と携さへ翌日の晩例の如くお參詣ゐ行くと偽はりて爰の家まで尋ね來よ心得たるかと説示せば豫て覺悟はしおから も父母のゐ側に侍づくは今日が限と思ふに付け我身が家ゑ居らずならばたつた一人の兄さんが嘸お便なく思すらんと彼や是やを思ひ過し塞がる胸ゐ堰來る涙悟られまじと心を配り日の暮るを待つ惜みつ流石ゐ長き夏の日も暮てはいとゞ短夜のはや鳴渡る十時の鐘兄良助の戻りしかばお參詣に行くと言なして門口までは出たれど是が別れと今更に言ふ言れぬ憂さ辛さ泣音を他ゑ洩さじと噛占む手拭腸を挿るばかりの血の涙父母の臥居る方ゐ向ひ心の中の暇乞前へ五足後へ四足進まぬ足を急がせて漸やくにして立去つ四五間餘り行過る折から彼方の物陰より現はれ出る善太郎最前よりの一伍一什餘さを覗がひ居りしと見ゆれ糸か。オー兄さん餘所ながら父母の樣子も見たく一つには其許の迎に出掛て來た少しも迅くト迫窠る兄善太郎に誘なはれ振顧き〳〵急きお糸の心狀如何ゐらん哀れといふも却々ゐ拙なき筆には寫し得ず看客よろしく推したまへ

第三章

却つて説く善太郎は其夜ゐ糸を昨夕の茶屋ゑ伴なひゆきて一泊させ其身も其家に一夜

を明し翌る日判人を依頼み來り遂にお糸を神戸福の貸座敷眞田樓へ娼妓に賣り二百圓の金を前借し假に善太郎が親元とゐり身賣の一段果にけり哀れむべし孝女お糸は我が心の正しきに比べ兄が毒手にかゝる憂目この世からなる地獄の苦界に自から進んで身を沈ませ漸やくゐして得たる金さへ親の爲ゐはならずして只徒づらに兄善太郎が惡事の腹を肥さんとは夢嘲さかも知るよしなく哀節しげき河竹の流れに漂よゑ娼妓とゐり借得し金は善太郎に殘らず渡して別るゝ際覺悟はしても流石は婦人落る涙を拭ひもあへずモシ兄さん夕べ私しがお參詣に行くと言なし出たるまゝ歸行かねば父母始め兄さんが(良助を指していふ)心配して嘸や尋ねて座するならん斯ゐる上は此れ金を貴郎の手から兄さんゐ渡してどうぞ私しの心を委しく語りて父母をよく慰めて一日もはやく父さんの御病氣の愈るやう私しの代りに貴郎の介抱くれ〳〵お頼み申しますといふゐ默頭く善太郎。ハは其許の言までもおし。私しも此より此金を持參ゐして久し振り面目なければ高い敷居を跨いて這入る親の家其許が身賣の一伍一什委しく語らば父母ゐも嘸滿足ゐ思すらめ又この金にて良醫を迎へ良醫を上たゐら御全快は瞬たく間ろの吉左右を心待ゐ必らず身体を大切に煩らはぬやう用心せよ餘り心配せぬがよいと慰さめられてゐ糸もまた。ホンに兄さんの言遂ゐ互ゑ身体が大切貴郎もお身を大切に其許

も壯健でト同胞が思ひ思はれ問つ問れつ親しき中ゐも禮義ある優ず劣らぬ兄妹思ひ他目は殊勝に見ゆれども心の中は雪と墨善と惡との二筋道盡ぬ名殘ゐふり分の嘘と誠の涙を拂ひ妹に別れて眞田櫻を立出し兄の善太郎己が名前の善の字に背く心の裏表この時既に日は暮れ遊廓の景色一段の詠めを添る不夜城の賑はひ初る誰やかれ立止まりて善太郎懐中探りて腹卷の中より取出身代金右手ゐつかみて眞田櫻の二階を見あげて憎さげにべろりと出す舌の先まんまと首尾よく我妹に恩愛情義の重石を掛け苦界ゐ沈て二百圓豪氣に骨を折らせやがつたと獨語つゝ片頬に莞爾冷笑ひてぞろのまゝに何處ともふく影を隱し逐電せしは人非人とも言ゐ堪たる非義非道憎むゐ餘る白徒かり期ておの憂勤め兄善太郎は改心ゐし私しが辛界ゐ沈みたる身代金を父母ゐ渡して弟の良助と力を協して居ると一圖に思つて案じゐがらも事ゐ紛れて四五日間音信もせで居たりしが餘り心にかゝるゆゑ兄良助に宛て一封の書面を認ため云々の山の事細かゑ言遣たり話頭分端良助は何夜の如く妹のお糸が楠公神社へ參詣せんとて深更に家を出たるまゝ待ども〳〵歸り來ず兄は素より子を思ふ親の心は落付ず重き枕を幾遍か擡て瞻望ゐ外面ゐ漁どる海士の聲すれば夫かとぞ思ふ誑されて涙速の浦に刈るといふ人のあしさ

へ恨みけり父母が嘲てば良助も立て見居て見まち不樂て案じる父母を慰めつ只一走りに走り廻りて必ず素ぬて將て還らんにお淋しくとも少しの間留守してたべと言捨て甲斐〳〵しくも走り出て楠公神社に急ぎゆき殘る隈なく尋れたれど影だに見ゑねば途中にて行違ひしか今頃は我より先に戻りしならん鈍まし かりきと獨り呟き又も家路ゐ引返し歸りて見ても妹は未だ歸り來ずといふゐ打驚ろきて如何はせんと轟ろく胸につき出すうしとも見しや丑滿の鐘に響く遠寺の鐘夜もはや更て許力ゐく病臥す父母を捨置て妹を尋ねに出も行れず此方も氣掛り妹の身も如何せしかと身一つに心は二つ右左思ひ悶ゆる無量の苦勞兎や角なす中夏の夜のはや明近くなりしかば東天の白むを待兼て炊きの業より父母の藥りの手當もとゝのへおき朝げも喉呑に通らばこそ支度ろこ〳〵家を出で八方ゐ駈け廻りて心當りを隈ゐく捜せど手掛りさへにあらざれば万一勾引ゑでも逢はせぬか夫れともまた斯までゐ深魄果し身を悔み世を恨きゐく思ふの餘り娘心の一筋ゑ淵川ゐどへ身を投て死はせぬかと只一人思ひ惱みて其筋へも家出の由を届けおき稼業を捨ても居られねば人力車を挽ながら猶も踪跡を尋ね居たるが家出してより第四日目の午後八時ごろ郵便脚夫が投込む書狀もしやお糸の手紙かと取手もおそしと表書を見れば正しくお糸の自筆殊に眞田櫻内よりと記しあるは心得がたし要こそあら

めと封じ目とく〳〵讀下せば思ひきや兄善太郎に再會せしより親の病氣を救はんと眞田樓に身を沈め借得し金は善太郎に殘らず渡して貴郎の手許へ送り居けまゐらせれば定めてお受取おされしおらんおど始終を事細ふ認ためお糸の許より送り越たる手紙をばくり返し見て貯拵ぬき獨りつく〳〵思ふやう兄善太郎に身代金を渡せしとあるからは疾にも音信れ來べき筈おるを今にその沙汰あらざるは如何ふしても心得がたし飽まで非道の兄なれば妹を欺むき娼妓に賣り身代金を掠め取り父母の病氣も顧りみず逐電せしと思はれたり扨は兎も角も是等の事を病たる父に告もせばまた一層の苦を增て病ふ障るともあらんと思ふ心を母親のみに密かに語りて心を得させ何は兎もあれ妹に逢て委しく仔細を聞上また許力もあらんかと急ぎ神戸へ趣むきて福原町なる眞田樓の出稼先へ尋ゆきおいとふ逢ば淺ましや變る姿の襤衣に心の錦は飾れども情を鬻ぎ色を賣る君傾城と成の果是も誰が爲め父親の重き病氣を救はんと思ひ迫りし孝女の苦心も兄善太郎の惡計較ふかゝる變目を見るのみか水の泡とぞなりにける嘆かはしくも怨めしく兄妹迭ふ泣つ訴りつ兄の不所存を怨みかこち欺むかれしを悔むのみ〳〵更外ふ詮方も泣々ふ糸を勞はりて斯なる上は是非もなし必らず身休を大切に煩らはぬやう娼賣せよ父親の前はよいやうふ我から繕ろひおくべきふと涙の間に慰さめつ妹に別れて眞助

はしは〳〵として我家ふ歸り母親とも相談て病臥す父ゑは此等のよしをつげて生中物思ひを掛んよりはトふ糸は大坂の豪商何某が小間使ふ雇ひたしと強ての懇望ふ默止がたく當人もまた行きたしといふゆゑ其方へ遣したりと子は父の爲に隱すてふあつ晴孝子の龜鑑也却説お糸の若糸は器致は素より十人並に優れて美はしきのみならず心狀さへいと柔しく萬事温和の質なるに孝道よりして苦海の淵にろの身を沈めし者おれば假ふも浮たる行狀おく夜毎に變る客ふ對し影日向おく大切に勤め待遇方の行届くゆゑろも突出しのその日より孝行娼妓と評判高く客の絶間はおかりけり去ば若糸は娼賣の中ふも身を慎しみて節儉を旨とし偶々客に貰ふ金は一錢たりとも榮耀ふ遣はゞ貯はへおきて父母の手許へ送り或はまた兄良助ふ心を添ゐ身は遊廓にあるもの、心は常に家ふ在て俱に活計を　すけしかば之がため聊さかは貧苦を補なふに足ものから父の病氣は尙愈ずお糸が娼妓ふおりし事をいつしかふ聞知りて同じ兄妹のろの中にも善惡邪正不孝のかくまでに違ふものかと兄と妹の孝養を見るに付ても憎むべきは善太郎の非義非道この趣むきを訴たへ出て引捕へて辛き目見せ思ひしらせてくれんずと堪ぬ怒ふ敦圉ど表向になす時は血で血を洗ふ耻の耻と良助は父右膳の立腹を止めてろの儘にうち捨ておきをり〳〵眞田樓に訪づれゆき妹若糸を慰めて娼賣の鬱を晴させて斯て光陰を過

すうち其年も暮れ明れば明治十年の春となりおれど若糸ハ泣の嬉しき夜は稀に笑ふて辛き娼賣の苦患茲に大坂堂島の米商ゐ中西治兵衛(三十八)と云る者ありいと有福ゐ暮をと云ど空米相場を事とすれば雇人も多くは使はぜ妻も先年没故て外に家族も有ぬ獨身者ある時仲間の交際で眞田樓へ登りし夜不圖お糸の若糸を敵娼として一夜の春を買たりしがろの移り香の忘れがたく二度が三度と通ふうち若糸もまた治兵衛の厚意を僧からず思ひそめその眞意ゑはだされて嘘から出た眞意の手管娼賣氣離れて身の素性苦海ゑ沈みし事由まで打明け語る閨の内聞ば聞ほど不便ゐものと思ふに付て可惜しく恁る孝女を苦海の淵に長く沈ませおかんより寧ろ受出し妻とおさゞ家の爲ゐもよからんと思ふ心を若糸ゑ告げおん身の情意如何にぞやと誘ふ落花に實を結ぶ縁しの糸の末長く流るゝ水ゐ漂よふこの身爭でか心あらざらん何分よきゐと頼むにぞ治兵衛はろの趣むきを眞田樓の主ゐ掛合ひしゐ若糸は他の娼妓と違ひ前借金も次第ゐ返し今は僅ゐ百三十圓の借あるのみ夫さへ濟せは旦那の淵自由と手易き返答ゐ廢業させんと情夫治兵衛はその支度に掛りしもその際折あしく相場の狂ひにて意外の損耗うちつゝき手元不如意の折おれば身受の金の工夫もならす今暫らく待てよと此等の由を若糸と樓主にも告しらせ金策の調のふまで延期をなして居たりしに話頭兩端て是より先き兄善太郎

は若糸の身代金二百圓を掻さらいろの當座は影を隱し酒と博奕に二百圓の金は忽ち水の泡違ひ果して元の木阿彌胆太くも眞田樓へ折々來て若糸のお糸をいたぶり小遣錢を貪ぼり取ると屢々なるにお糸もまた始めの程は妹を欺して苦海ゐ沈め親ゐ難義を掛るといふ不幸不義の罪科を涙ゐがらに幾度か異見せしかど糠ゐ釘うつて纔りし身持の惡さ素より聞くべき兄ならねば言て甲斐ゐき事と見限り無理な無心も三度に一度は詮方ゐく〳〵承諾は一圓二圓と少しつゝ貸與へしことあるゆゑよき金壁に有つきたりと頃は五月廿八日の夜今夜もまた幾干の酒代をせしめんと眞田樓の店先へ訪づれ來りし善太郎妓夫を賴みて二階へ登り案内知ッたる妹が部屋へ入らんとせしが奥の間に客と覺しき一人の男と私語く聲音は正くし若糸要こそあれと廊下傳ひ後に廻りて窺がへば障子に映る男女の影耳側たてゝ聞いるとも絶て知らねば男の聲。豫て約束した通り一日もはやく廢業させ目出たく夫婦ゐならんものと思ふゐも似ず相場の高下損のみ續きて手許の必迫腕づくゐも力づくにもおよびがたきは金の工面夫ゆゑ今日まで延々にゐつて居たれど來月の十三日には或方より三百圓餘の入金あれば受取しだいろの金を携さへ來りて廢業させん此等のことを糊元ゐも知らせやり又樓主ゐも告げ知らせ遊廓を出る身扱の準備よく整のへて待たまへト言ば若糸の聲として。身儘ゐゐるは嬉しいが

父さんや母さんの「オー夫も殘らず承知した其許と連添ふ上からは私がためゐも大切の親家へ引取り世話する積り。何から何まで貴君のお兄ト語る始終を障子の此方ゐ洩聞く兄の善太郎何か心ゐ默頭つろのまゝ密に立去りしを知るもの更ゐおかりけり

第四章

茲は神戸と大坂の間を往復ふ蒸瀛車の停車場なる三の宮人足しげき大通を右へ折て半丁餘りろの裏町の穢くろしき居酒屋の一間を借切り集まる破落戸五六名酒肴を中に車座の頭と覺しき一人は年の頃三十三四色黑く眼尖どく痩肉ながら何處とおく寥身のある形相は言ずと知れしお糸の兄また彼の黑棍善太郎ゐり仲間を敵手に酬つ献へつ酒宴最中一人の惡漢手に持つ抔下におき。モシ兄哥例の用事かしらぬへが賴みてへことがあるとて私ッち等五人を呼つゞへ分ゐ過たる馳走に預かりこんゐ難有てへとはねへが賴の一件を聞かぬへ中は泥付て酒も呑ねへ先づ用事から聞てト言ば傷からまた一人。ホンに三次のいふ通り賴といふは何いふ節か聞ねへ中は氣が濟ねへ日頃から世話ゐある兄哥の事ゆゑ否とは言ぬ火水の中でも飛込む積りト問掛られて善太郎まだ。時間も迅ければゆる〳〵話さうとおもつたか落付て呑ぬといふゐら事由を話して聞せようト四方見廻し聲を低め賴みといふい孫てより手前達も知つての通り已の妹眞田樓の若糸

奴がなじみ客治兵衛といふ相場師が今夜妹を身受せんと三百圓の金を携さへ人に猶叢の源車に乗り福島へ起むかんと爰の停車場から八時の源車へ乗込む由を聞ては遣さぬ地獄耳已一人の手にあまる大仕事ゆゑ汝等を語らひ治兵衛の來るを途中に待伏せ引ッ捕へて所持の金をせしめる手段は期々と三次が耳ゐ口を寄せ囁やきしめせば點頭く三次夫から夫へと密語果て同氣求むる棍悪仲間一も二もおく承諾つ且呑み且私語き尚左ゐ右と謀し合せ待間程なく日は暮てはや八時ゐ近づけば時分はよしと身支度なし六人齊しく連立て居酒屋を立出つ便宜の場所へと趣むきて見えつ隠れつ治兵衛の來るを今や遅しと待掛たり善太郎は仲間の兇漢五人に向ひていへるやう何でも慥ゐ治兵衛奴は腕車で來るゐ違へねへ六人一所に掛るは無益敵手は僅かゐ只二人已と三次と金八の三個は爰ゐ隠れ居て這奴來らば擊て掛り喧嘩の間ゐ持所の金を攫ッて逃るは已が役三次と金八は人力車の前後から飛掛り梅王もどきで腕車の留役汝等三人は少し離れて役方の本蔭に隠れ居よ忍べ〳〵と說しめすオー合點だと默頭く五人糾かに手筈を謀しあはせ便宜の本蔭に身をかくし待ぶせなすとも神あらぬ身の治兵衛はかくと毫しらず深くも契りし若糸を身受の金のとゝのひしかば心ろも空に氣もろゝろ惚て通へば千里も一里妾許急よるの道源車の時間ゐ後れじと酒代を増て車夫を促かし腕車を馳て松並木へ

來掛る折しも樹立の間より頻冠りせし兇漢四五人忽然として現はれ出で突然車夫の携さへたる提灯はたとうち落せば灯火は消て眞の烏夜車夫は驚ろき思はずも揖棒持つ手を放せしかば何かはもつて堪るべきもんどり打て頭天倒車の上より轉び落たる音は聞ども目には見えぬ治兵衛をかくと逸し見て闇にも夫と認し兇漢三人酋しく擊て掛るを左はさせじと問へる車夫あぐる鉄拳の早蔵を茫に受る闇仕合滅多ゐ挑み爭ろふたり斯て治兵衛が携さへたる三百圓の金圓は韋囊ゐ入れて身に附ざれば囊ゐ居車の轉覆しとき二間ばかり彼方の地上に飛び散たるを善太郎は迅くも見認て走り寄り取らんとするを客の品物取らしはせじと車夫もまた同じく駈寄り取らんとす擊つ擊れつ双方の腕立飢たる虎の肉を爭そひ痩たる犬の骨を競ふもかくやとばかり優ずおとらず一寸先は闇の夜の迭ゐ敵を見とめかね或ひは合ひ或ひは離れ爭鬪果し奉麻興美のかひなゐ甲乙なきものから車夫は僅かの透を得て落ちたる革囊を拾ひとり逃足出して逃けんとするを左はさせじと善太郎猿臂を延して件の車夫が手に持つ革囊をしかと攫り力限りに引戻すイ引戻されて迫地〳〵と蹌踉く足元治兵衛も素迅く駈寄て後の方より善太郎の襟髪無手とかい摑み押据られて思はずも怯みし機會振拂ふ車夫の鉄拳は善太郎の肩間へ當りて弛む手脚得た、と車夫はその儘ゐ迅くも此場を遁去りけり夫やつてはと焦立つ治兵

衛善太郎をうち捨て車夫を逐んと身構ふす善太郎は又治兵衛をばしや夫と見認て擊掛る事の樣子を透し見たる三次等初め五人の曲漢むら〳〵と集ひ來つ治兵衛を中に取圍み杭る鉄拳ノ雨霰治兵衛も今は一生懸命しばしは挑み爭ろひしふ忽まちふして思ふやう命に換る寶はおきにかゝる無頼の黒棍を敵手となすも多勢ふ無勢兎ても角ても不思議の災難免るゝ道はあらずかし怪我せぬうちふ遁るが肝要と擊來る鉄拳を右ふ受け左に除つ潛り拔け命から〳〵逃出す踵先ふ障るは確乎に烟草入そのまゝ手迅く捨ひ取り闇に紛れて遁去りたり殘るは兇漢只五人砂ふ塗れし衣うち拂ひ勞して功はおかりきと顔見合せてつぶやきつ舌うちなせば草の葉の影ふ夜露を吸ふ蟲の我が口眞似かおとすなり是も同じく立去りたる跡は霏寳吹拂ふ樹末の風と蟲の聲はかには絶て音もおきをりからこは〳〵此處ろへ立戻たる以前のしや夫さきの騷ぎに挽拾たる空車を挽ながら元來し道へと回りゆく處も此車夫は別人ならで善太郎が實の舍弟れ糸の實兄良助なり拾ひ取りたるかの革囊を腕車ふ乘せて挽ながら歸る道々獨り言わが腕車といひ客人の革囊も無事に我が手に入れど屆けたいにも客人の住所名前もしれぬ悔しさ一夜たりとも斯る品を我家ふ預かりおかんこと譏身影さは言までもおく心苦しき限りふころすす時も早くこの趣きを警察署ふ届け出で上の手を借り客人の手許へ戻すふ如くとなし然な

り〳〵と胸ふ問ひ腹ふ答へて默頭つ革囊の中には我妹を身受の金の三百圓入れてあるとも毫しらず心急ぎのせらるゝまゝ足を迅めて行く程ふ三の宮の停車場を通り過ぎ二町ばかり彼方ある居酒屋の前を過る際不圖該家の裡を見れば絶て久しき兄善太郎が四五個の破落戸と膝を交へて酒酌交し何やら語り居たりしかば是はとばかり打驚ろき現在の妹を欺むき苦界ふ沈めて身代金を掠め取たる惡事の段々及ばぬまでも一ト通り談判せんとて戸口より入らんとせしが待て暫し去るにても現時は如何なる業をおすやらん餘所ながら樣子を聞きろの上にて兎も角も詮術わらんと我と我が焦立つ胸をれし鎮め腰障子の影ふ身を寄せて側聞おすとも知らざる兄はおひ〳〵弼る酒の酔始じめの小聲ふ引換て興ふまかする高調子妹ふ糸を欺むきて苦界に沈めし起源より若糸がなじみ客彼の治兵衛が身受せんとて三百圓の金を携さへ行く由を圖らず廊下で洩聞つ途中にまち伏ろの金を强奪なさんと汝等を語らひ今宵仕事にかゝる失策その目論見も畵餅となりくるまやに肝心の革囊を取られて此方は無駄骨馬鹿〳〵しいと口こゝと語りつ聞つ惡梶仲間酒肴を中ふ已等が爲た惡事の自慢話し最前より戸外に佇立み始終の樣子を聞知る良助且驚ろき且呆れ思ひきや兄の惡業かくまで增長したりしとは去ふても此なるかばんの無事ふ我手に入しこそ不幸の中の僥倖ふり幸より直樣福原なる眞田樓ふ馳

行て妹に逢てきゝたなら旦那のお宅も知れるであらう我手づからこの革囊を旦那ゐ返して餘所なから兄の非道を掩はんと斯る中にも兄を思ふ友愛情義たのもしき思按も道も引返し福原さして元來し方へ走去らんとして思ふやう兄の惡事を知りながらこのまゝ餘所ゐ捨おかんも弟の友誼に戻るに似たり聞れぬなからも一と通り異見の言葉を盡したなら万ゐ一ッも先非を悔み政心おすとあらやせんト獨り心ゐ點頭きつ元の所に身を潛し待ともしらぬ善太郎はや十分に醉を盡し酒店の戸外へ立出るを呼止めつゝ裏手なる河岸通りへ伴おひゆき絶て久しき兄さんゐたま〳〵逢は逢ながらろの喜びに引換て實に怨めしき阿兄の不品行父母の難義も顧りみず逃亡せし上現在の妹を欺むき苦海ゐ沈め身代金を掠めしゆみか倘飽足らで若糸の苦海を逃るゝ身受の金まで途中に待伏せ掠奪せんとはト立聞したる一伍一什を涙おがらゐ口說きたて猶重ねていへるやう妹の爲ゐは大切お旦那治兵衛のお倶せしろの折の車夫は斯いふ良助也其金も我手ゐ入りコレこの通り爰にあり始めはこの持主も何處の誰としらざりしゐ壁ゐ耳ある世の習ひ阿兄等が話しを側聞き始めて知ッた金の履歷言たい事は山々あれどもこの金おくては旦那の難義妹の上も氣配はし屆けた上ゐて又逢んどうぞ私しの異見をきゝ改心してくれ兄者人と道理責たる弟の意見を有合ふ材木に腰うち掛け欠しながら聞居たる兄善太

郎は空嘘ふきモウ言種は矢ぎりかイヤモウ御無理御尤もれ前の詞に從がつて改心しやうと言てへがお氣の毒だがマア否だト言放る不法の返答を聞くより流石の良助も憤然として。餘りといへば情おいなざ言分も山はどあれど重ねて逢ふまで預けておく去ばとばかり言捨て起上りつゝ塵〻ち拂ひ寸時も早くこの金を治兵衛に渡して安堵させんと一散走りに駈りゆく跡見送りて善太郎大骨打て驚ふらぬ弟が手に入る彼の革囊寶の山に入りおがらむざ〳〵人手に渡さんや跡追掛けてオー左樣じやと逸足出して追ひ行く跡より仲間の惡梶力を添へんと同じく追掛け行く程ゐかゝるべしとも知らぬ良助少しも迅くこの革囊を治兵衛の手もとへ屆けんものと善太郎ゐは心殘れど其場を別れて二タ町三町走りながらに思ふやう治兵衛の家へ屆けよか夫とも爰より瀧車に乘り福原ゐ趣きつ妹に逢ふて今宵の始末を語りてのちゐ屆ける都合はろの折の便宜ゐ任せんか如何せんと右思左思まだ思慮の付ざるうち後ろの方より突然に擊てかゝりし曲者五人先に進みし善太郎聲荒らげて罵しるやう「ろの品此方へ渡してしまへといふ顏詠めて二度驚愕「誰かと思へば善太郎執念くまつはる惡心の改らぬ上は兄弟の緣もいよ〳〵今日限りモウー是までと立向へば「エー面倒な疊んでしまへ「オー合點だと無聽の曲者良助一人を中ゐ取圍め石左りより擊つて掛る此方も今は一生懸命力限りに闘かへば

五人ゐ一人敵しかぬ且たゝかひ且走り僅かに透を得りしかば身を離がへして逃出すこの時せでも彼の革鞭は奪はれずして我手ゐ在り逃しはせじと善太郎迅くも追付き良助の胸倉掴みて引倒し無二無三ゐ撃据つ手に持つ革鞭かき擂らひ是さへあれば用はないト突放しつゝ踵を施し暗に紛れて迅早く跡を暗まし逃去りしは無惨といふゐ哀れなり咄頭兩端て單表治兵衛は先刻の危難の場所を命からゝ逃延て町家の方まで走り來つ圖らぜ手に入る萇草入もしや後日の證據となり彼の曲者の手掛ともなりはせぬかト心付き月ゐ透して能く見ればテッカ掴みの煙草入いかさま曲棍の所有べき品中には何か入あるか心急くまゝ披き見ずろのまゝしかと懐中し熟々思へば今夜こそ廢業させんと約束せし若糸はさぞまちわびて居るならん途中の危難を知らざれば怨みらるゝは是非なけれど一旦拠うと約せしからは樓主といひ親元まで我が吉左右をまつならん迅く此等の顛末を告ればならぬ事あがら漸やくにして整へたる身受の金の三百圓むざゝゝ賊に奪ひ取られ違約ゐ陥るも是非なき次第今から逢ふも面目おけれどもさりとてこのまゝ捨置くときは浮薄とのみ思はれん逢ふて告るに如くはなしと思按も道もひき換て三の宮の停車場より人ゐ羽翼の新工夫漁車ゐ飛び乘り一瞬千里福原さして赴きける

第五章

夏の夜早く更けろめて漁車の往復も十時の發車乘込む中に治兵衛もまた通ひ馴たる福原の花街へ急ぐ心ゐは漁車の駛るも遲く覺へ擬に拾ひし萇草入を再たび取出し去るにても中には何が入れあるかト開き見れば婦女の文売二世と契りし糸の手跡ゐ擬ひあらざれは箇はろも什麼ゐと不審ゐがら讀下す文言ゐ「ろもし樣の俤無心ゆゑぞふにもいたしは用達申しあげたくゆへぞも度々のことゐて思ふゐ任せぞ仰せの通は届きかねゆまゝ壹圓ざけさしあげたゝゝゝとふぞくゝゝふ心を改ためられぞ兩親樣の俤安心なさるやうくれくゝねんにたゝゝゝ若糸より」と讀畢り先の名宛はあらざれと偖は先刻の曲漢が是なる艶書を所持ゐす上は必らず若糸の密夫にて飽迄我をたぶらかし身受の金を工風させ密夫と謀りて途中にまち伏せ金を奪ん較計のわゐに鈍くもかゝる不思議の災難外面如菩薩内心如夜叉七人の子は生すとも女ゑ心許ずゐと豫て知る身のおぞましや鼻毛延して通ひしを今更思へば無念ゐり己れ狐め畜生め思ひしらせてくれんずト男心もゆゑゑ思ひ亂るゝ有也無也の左右の思案も出ばこそ一圖に夫と思ひつめ切齒をゐして憤怒のをりから漁車は迅くも神戸なる停車場へ着くとろのさゝゝ下りる間をろしと腕車を傭ひ跡押繕曳三人挽福原さして一目散車搖を飛翔ふ燕雀の呼く砂を蹴立て行く空の雲を霞と大急ぎ忽まち真田樓に馳付けて物をも言ず若糸の部屋を目覓けて段階子足

音荒らく駈登る妓夫仲居等は常に換りし治兵衛の暴動ゐ驚ろき恐れ何事の出來せしかと治兵衛が來りしその由早くも若糸ゐ告たるゑ當下若糸は豫て約せし身受の當夜ゐりければ夫々支度を整のへて今か〳〵と治兵衛の來るを待わびて居たりしが今ろの人の來りしと告るを聞くより今更に飛立つばかり心嬉しく勇こび勇みて出迎ふ若糸の顔を見るよりも治兵衛は活と眼に角立怒の面色朱を沃ぎゑらまへ詰つ聲荒らげ「イヤ若糸手前に限ッてこの樣ゐ悪法を書くまいと思ひの外の悪較計あくまで我を誑らかし身受の金まで調達させ剰さへ奸夫と謀り途中に待伏せろの金を奪はしめたる憎ッくき女狐め狸め畜生め誑すが娼妓の常とはいへ餘りといへば腹が立つどうして呉れうと罵しり狂ふ思ひ掛ねば若糸は呆氣ゐ取られて忙然と治兵衛の顔を見詰つゝ此身に取つて露聊さか覺えもあらぬお前の言葉大方誰かゐしやくられてか但しは卑妾ょ愛想が盡き身受の事を破談にする手段ゐきさまゝ濡衣を着せる積かしり侍らねば井は情ゐし心強し外ゐ增す花出來たまひ卑妾が否ゐかつたなら何故明白に云々と言聞せては下さんせぬと言せもわへず彌增す怒氣「ろの言譯聞耳持たぬ確乎な證據は是ゐる艶書覺ゑがあらうと眼先へ突付け遠慮會釋も情ゐや左手を伸して若糸の黑髮むづと引つかみ有合ふ煙管を苛責の杖散々に擊据て血走る眼光髮逆立て。言ふて返らぬ　ゐがら斯まで手面ゐ誑か

され通ひ詰たが口惜いやがてろの筋へ訴たへ出で三百圓の大金を奪ひ取りたる化の皮はがして怨みを晴らさにやおらぬその時吼面かはくなト罵しりながら烟管の杖憐むべし若糸は思ひ掛なき無實の災難身に降りかゝる濡衣を乾す術さへもなく計譬發矢と折れ飛ひて思ひ亂るゝみだれ髮擊れゐがらに聲慄はし「この手紙を證據として卑女を深く疑がひたまへど井は情なし心強き卑妾ゐ二人の兄さんあり一人は品行のよからぬ海へ身妾ゐ迫る度々の無心ろの言譯に賜りし手紙よく讀ゐて疑闘を晴してたべト泣つ口說つ涙の間にうち詫るも治兵衛は更に耳にも掛けず「エー蝶々喃々と喧ましい言葉を巧みに又してもかゝる手管の八重ゐすきろの手じや行かぬト蹴たり蹴たり思ふがまゝゑ擊ち懲らし覺えていろと若糸を尻目に掛て起ょる「ソリヤ餘まりなやァまつてト袖ゐすがりて一生命止むる手先を振拂ひ突放しつゝ行かんとする此騒動を聞付來る妓夫仲居どふいふふ腹立かしりさせれど太夫さんも彼の通り託つてお在ぢや程ゐおゆるしなされ湯機嫌をお直しゐされて下されませ平に〳〵と右左止むるも聞かず突退けの蹴退け疊蹂立て階子段足音あらく駈下りつ立戻りたる後ろかげ見送り〳〵若糸は我が部屋ゐ入るとろのまゝ身を投げ俯してワットばかり前後正体なち倒れ諸袖濡せ遺憾の涙思へば〳〵怨めしゐ今日は若海を脇出て互ゐ思ひ思はれし治兵衛さんと夫婦になり

父母はじめ兄さんにも安心させんと思ひきや卑妾を身受の大金を途中にまち伏せ奪ひ取りしは亦かの兄さん善太郎とはたの手紙ふて讀まれたり兄さん一人の不了簡より治兵衛さんは疑問受け無實の難義解くよしも絶る縁を如何ふせんと婦女心の一筋に思ひ凝てはあく迄ふ右左の思案も出ばこそ此身に覺ふき由を死んで言譯せんものと忙たゞしげに鏡臺の引出明けて取出す鋏剃さか手ふ取つて咽喉にふし當てアワヤ自害と見へたるをりから傍輩娼妓の甲乙が迅くも駆付け若糸の刃持つ手を去かとゝり「死ぬるは更々無理ふらねど是には何ぞ深い様子があつての事と思ふゆゑ及ばずながら私等から治兵衛さんを執成て元の鞘よ納ゆる工夫わるい様にはせぬ程にどうぞ任せて死ぬふゞゝ短氣なことをふさんすふト止むる手先を振拂らひ深い様子のある事は私しも知て居ますけれど明けて言はれぬ胸の中どうあつても死なねばならず止るは却つて情なし其處放してと身をもがき死なんと狂ふを右左瀬やくにして止められ其場はうのまゝ納まりしも納りかぬる若糸の胸は憂也憂也せきあへぬ涙間なき袖の雨自害とまでに突詰しを傍輩の者に止められ其夜は心地わしきとて我部屋ふ閉籠り衣うちかつきて寢て見つ又起て見つ蚊帳の内こよひは殊に廣ろきを覺ゑ枕に付し比翼の紋も今ぞ仇ふる色摸様情郎の遺愛情意の種つら〳〵思ひ廻らせばこよひは廢業の祝ひとて傍輩ふも別れを

告げ淚やまれたる言の葉の露もまだ乾ぬ束ぬ間ゑ男心と秋の天變る枕のその中ふ二世と契りし彼人に振捨られし吾身の因果身受の金を奪ひし曲漢その本人は兄さんと知れては居れど云々と言に言れぬ同胞が血で血を洗ふ恥の恥加之ふらずこの事の表向ふふるときは兄さんの身ふかゝる縲紲假令良からぬ兄ふもせよ妹の身としてろの憂目を他所に眺めて居らるべき去迚このまゝ止むときはこの身の情夫と言募らるゝ治兵衛さんの疑團を解く由もなき絶体絶命かゝる憂事のあらんとは知らで卑妾の廢業を待ちわびたまふ両親に此等の由を知せなば病を常なる父母の病苦の上に一層の憂苦を重ね飽までも苦勞に苦勞を掛けさぬらせ万一の事のありもせん不孝の上ふ不孝なり幾遍思ひ返しても存生がたき今般の切迫ト狹き心も憂事に尙更區域をせばめられ死を輕んする婦女子の情折から聞ゆる表坐敷の客か藝妓か東京風の音緒粋な水調子一中節の小春髪結

一中節「所詮此世はかりわけの戀ふうき身をなげ去ま田覺悟決し心をば主に何とぞつげの櫛合せ鏡と泣く涙おちて流れてびん水の裏れ果敢ふき花の露消る間近き風情ふり」

と謠の文句も我身につせされ既ふ覺悟は去ながらも先立つ不孝娘料をふ詫かた〳〵た

丶一筆切ふば切よ命毛を去ばしのはして急がんと身をおこしつ蚊張を出て硯ふ墨をすり流し巻紙皺を引延して涙ユ濕るふじみ書一字書ては伏轉び二字書ては咽返る千萬無量の憂苦勞又も開ゆる

一中節「あはれ逢瀬の首尾あらば決を互の命日を名殘の文をいひかはし最早命も去ゞみ川深き思ひに堪かねて名を流さんす心と見た去りとは狹き浮丁館死んで花が咲くかいな樂しむも戀悲しむも戀といふ字ふ二つはあい誠は辛抱一ッぞや」

若糸は遺書を認めふがら獨り言。あの淨瑠璃を聞ふ付け樂しむも戀悲しむも戀といふ字に二つとるい命をすつるは短氣ふこと丶知つてはねれど今更ふ死ぬより外の思案はふしと四方憚かる去のび泣き道理責て哀れなる孝女の心狀ぞ痛ましけれ

第六章

他所の憂苦を去らず顔ふ表坐敷の醉狂連がいと面白く謠ひさゞめく一中節の呂の落し一中節「私しも元は廓ふて おもしろい事花美ふ事わけのありたけ仕盡して戀と悔の二ッ櫛色は勤めの樂しみぞゝ辛い瀬ぐしの辛抱は緣と月日を待つがよい末は人目の關越てつまや夫と呼れつ言ついか程辛い憂目をもつれて世帶を好た同志添ひ通すめが誠ぞやどうぞ心を取り直し氣を入換て見さんせとるが身の昔つまされて異見話しに元結のゞもよしや結ゞ丶ろ聞て小春は手を合せ粹ふお前の浮異見でとやかく思ひくすぼれし胸の浮雲はれしぞや必らず案じて下んすふと口と心の二かはめ人まへつくる涙の笑顔開き初たる朝顔の露を含むが如くあり甘し辛しを聞ふて胸ふ堪ゆる若糸の憂を慰さむ術としならて腸を斷つ媒介の歌も命も切文句涙ふがらふ若糸は櫻主と父母と兄良助及び情夫治兵衛ユ宛たる都合四通の遺書を心靜かに書畢り人目を去のびて庭へ飛下り飛石傳ひ庭口の柴折戸密と押明て見答められしと拔足さし足通れ出つゝ一散ふ據て死場所と定めたる淺川の北手に當りし溜池さして心も空堤ふ添ふて走りゆく此夜は是明治九年六月十三日の事にして月は雲間に掩はれつ天さへ殊ふ涙含み泣出しさうな雨模樣闇は黑白なし鳥羽玉の物凄さも恐ろしさも死を決し る心には更に恐るゝこともなく池の邊に來てみれば我より先に人あり て木立の間より進みよる男の影にうちふどろき見答められては詮なしと池の水際ふ生しげる大きやかふる柳の木の影に身を潛ませて呼吹を殺し窺がひゐるとも知るや去らずや件の男は佇立ながら天うち仰ぎ腕又ぬき四方見まはし獨り言今日は如何ふる惡日ぞや降て湧たる身の災難捨ふ命は惜しからねど臨終の際の心ろ掛りは杖柱とも頼みに思ふ父上樣の病重病この春よりの長煩らひ昨日ふ醫者のふ診斷ユはこの暑中が危篤と

匕を投て見放され又一人の母様にはあれやこれやの浮心配にて幼年に似氣なき浮老衰
この身が非業の死を遂しと聞かれたならば父上には病苦の上に憂苦を増し萬一の事で
もあつた日には母さまのお嘆きまた一つには妹のお糸邪見非道の兄が毒手にかゝる
苦海の憂き娼賣この身が死んだろの跡はさぞ心細く思ふべし彼ゐ付け是に付け末練ゐ
から死ゐともおい在は去りゐがら大切のお客の革嚢を拾ひ得て届けもやらず途中ゐて
奪ひ取られ去のみゐらずろの盜賊は現在の切るに切られぬ實の兄表沙汰するときは
血て血を洗ふ恥の恥夫のみならず肉身の兄を罪に陷さゐやゐらぞ搗て加へて革嚢の
中ゐは妹の身受の三百圓兄の毒手に入し上はお糸の廢業も覺束なしこの身一つの不注
意より三方四方ゐ不都合を釀せし科を償のふ手段も死ぬよりほかは泣くばかり死ぬべ
き門に死なざれば死ゐ增る恥ありと物の本ゐも記しあり假令へこのまゝ身を投て底の
もくづと消るとも草葉の影より餘所ながら父母ゐ先立つ不幸の罪科は百歳の後冥土にて
せて後々の榮を永く守るべし名殘は尽じ父母ゐ先立つ不幸の罪科は百歳の後冥土にて
ゆる〳〵お詫申べし夫らばとばかり我家の方に向ひて去ばし手を合せ心の中の告別正
直一圖の良助か散際潔き覺悟の繰言南無と一聲アワヤ今入水なすや將甚麼ゐ覺悟は同
じ若糸は咄嗟とばかり走　出て兄さん待つたと取すがる此方も驚ろき振回るさういふ

其許は妹お糸かゝる深更にたゞ一人この邊に彷徨ひ居るは定めて深き仔細あらんが此
兄もまた死ゐねばならぬ切なき仔細のある故ま縮の始末は宵の中郵便ゐて其許の許へ
言送りしが届いて讀しか但しまたかはしらざれど其許に對して面目も泣くに泣かれぬ
此身の失策兄が死んたろの跡は必らず身体を大切にこの身の分とも二人前父母に孝行
してくれと言葉せわしく示しつゝさらばとばかり言捨て身を投げんとする程に若糸透
さず引止め。夫ゐどまてに思ひ詰化ぬる覺悟の問ず語り木かげにありて殘ず聞知りさ
ら〳〵無理とは思ねど身妾もまた生てゐられぬいろ〳〵の譯ありて今夜かぎりと思つ
め眞田櫻を去のび出て此なる池に身を沈め骸しとめず死果んと來りてみれば兄さんゐ
も言合されとこの池を且ひゐ死出の三途川端最期の際に鬪らずも出逢と言も兄妹が流
れつきせぬ不思議の因縁ト今宵治兵衛がこの身をば根引なさんと三百圓の金を携さへ
來る途中賊ゐ出逢てろの金を奪ひ取られしのみならずその捕治兵衛の手に入りし彼曲
漢が萱草入中に入あるその手紙は度々の無心の言譯ゐ贈りやりたる身妾の手跡夫が證
據の根となりて解ゐ解かれぬ郎情の疑團覺えもあらぬ濡衣を着つゝ歸にし二個の中を
割くも兄さん善太郎の欲ゐ迷ふた非義非道明て言れぬ辨解のわが身に曇りなき由は命
をすつる外ゐしと思ひ定めし顛末を語るも聞も涙のみ先立つ不幸を如何にせんと兄妹

互ひ手を捕て愁に沈む浮草の浮む瀬あらぬこの池は地獄の底にありといふ此世からなる血の池か思へは〳〵この身はど世ゐ淺ましきものはあし一人の兄ゐ苦しめられ恁る憂目を見ることよと千萬無量の嘆きの聚〳〵愚痴にあるのも無理あらず暫らくありて若糸は涙拭ふて兄ゐ向ひいへるやう。いつまで言ても同じ事とてかくても治兵衛さんの疑團はらす術もおく革嚢の金を盗み取りたるろの盗賊は疑がひ受し密夫ゐはあらざれど切るに切られぬ現在の兄さんなればいとゞ尚重なる罪の底深く契りし人ゐ振捨てられ何面目に長生ん貴兄は跡ゐ長生て親への孝行は言までもなく治兵衛さんゐ逢たならこの身ゐ曇りおき由を宜なに傳へて玉はれかし底の藻屑と消ゆる身も貴兄始め心善からぬ兄善太郎の罪を購なひ死すると思へは狗死ならず後の世さへゐ心安かりト言ふを良助聞あへず。左思ふは道理あれど夫は其許の心得違ひ能く思ふても見たまへかし此兄が初めゐに入りし旦那の革嚢を兄に見せずは奪ひ返さるゝをもおきに言甲斐なくも多勢に無勢とう〳〵兄に奪ひ取られ旦那は素より其許まで合す面もなき明かす血を吐く思ひ時鳥事の起源はこの兄の不注意其許は決して死するゐ及はず無益ゐ繰言人も や聞かん又も障碍の出來ぬうち我先づ死おんと身を起す袂ゐすがりて止むる若糸ろは短氣おり止りまたまへ兄の死するを餘所に見て爭で在生へ居るべきぞうぞ身妾を死な

して言も涙の曇り聲兄妹互ひに死を爭ろひ迭に止め止められ死ぬるも生きるも孝貞節義まさず劣らぬ勝殊の擧動幼おき時より遂ゐ一度も物爭ろひせしとなく兄は妹を慈くしみ妹は兄を敬まひつ思へ思はれ睦ましき兄妹中も死に臨み潔き曇悟の名を惜み節義を重んじ我死おん已れ死おんと爭ろひの果しおければ兄妹は大地にどつかと坐を占て見合す顔は目に涙しばし詞もおくばかり良助思按の頭を擡げ。かくなる上は是非もおし親ゐ先立つ不幸の罪重きが上ゐ重けれど兄妹とも〳〵この池に齋しく身を投げ死おんは如何ゐト問は若糸も顔を上げ涙の間ゐ莞爾りと笑を含みてひざすりよせ升はなゐよりのことゐころ然は言へ二人手に手を取り入水おして死果おば事由を得ーらぬ人々の認めて情死と言れやせん心掛りは只是のみと言ふを良助打消して誹らばろしれ笑はばわらへ知る人ど知る兄妹の丹き心はいつか一度しれざるをのあるべきや由おきてとをれもはんより死出の旅路へ急がんとしほ々として起上れば力なよげに若糸も身を起しつゝふたたびまた池の傍に歩みより後れたまふな。おくれじと呼つ呼れつ氣を勵ましロに唱名掌を合せ兄妹ひゝしく身を跳らせすでに斯ふよと見へたる折から思ひ掛なく後方より兩人まつたと呼止られて驚ろく兄妹は思ず後方を振顧は徐々木蔭を立出る洋服ごしらへ威儀めしく闇にも輝やく洋刀の曇らぬ光り保護の餘澤言ずと知れし警

察官吏警部とこそは、官服の印章ゐしかと顯はれたり兄妹は恐れ謹しみてそのまゝ大地ゐ蹲踞る警部は左ころと進み寄り。其許達二人最前より手に手を取りて何やらん涙と倶に嘯やくは痴情に迷ふしら露の命を捨る若い同志無分別なる情死おらめと尙も樹影ゐ停止て様子を聞けば思ひきや色慾ならで兄妹が綾にからまる悪因縁善悪邪正雪と炭一人の兄に苦しめられ節義に迫りて死を爭そひ果しおければ兄妹倶々死を決したる心の中辛苦左ころと推測る去ながら今爰にて其許達が死ねばとて失たる金の出もせじ又二つには父母の悲嘆を思はぬ不孝の罪九ッの世を代ゆるとも贖ふゐ期はあらずかし死する命を存生ていつまて草のいつまでも今の心を改めず父母に孝養怠たらぎ身を大切に仕へなは春にあふて咲うむる梅花の開運なからずや死はやすく生は難し必らぎ倶ュ死せんおどゝの短氣は深く慎しむべしト道理責めたる訓諭の言葉に二人は夢の覺たる如く慰さめられつ勵まされ有理と思ふ色見して平伏の外なかりける警部は頓て消服のかくしゐ手首さし入てやをら取出す呼子の笛を二度三度吹き鳴せば遥か彼方に角燈の閃めく光り見へつ隠れつ沓音高く馳來る巡査を呼て彼の警部は二人を巡査ゐ引渡し道引返して福原の警察署へ拘引させ一應取調べの上ろの翌朝良助は親元へ若糸は眞山樓の主を呼出て引渡され善太郎の犯罪は捨置くべきとおらずと八相書を以て嚴しく踪

蹟を探偵されるれど更ゑ所在はしれざりけり此日良助は我家に戻りてホット息を吐き心弛みのせしゐや今まて痛みも覺へざりしが昨夜兩度の爭鬪に肩とも言ず腰とも言ず打身の痛さ堪へがたく起居も不自由におりしかば心ゐ掛るをのみなれど焦立つのみにて詮術なく今は包むゐ包まれず夕べ有つる事の始末を父母にも打明て語るも聞も親と子が汲と拭へど涙の泉は流れて盡ぬ涙川憂を造る瀬は奈床興美の甲斐ゐき事を繰返し兄善太郎の悪業の怨むるのみゐて詮術ゐし若糸はまた治兵衛方へ行も夕べの盗賊は臭妾が實兄善太郎にて貴郎の革靏は次の兄良助といへる者ぞかの夜旦那のお供をして首尾よく拾ひ取りたるを再たび善太郎ゐ奪はれし等身の言譯と兄の不注意を或ひは詫び或ひは嘆き筆の命毛續くかぎり長々と文に認ため是非ゐ目もじと言遣たれど更ゐ返事もあらずしてはや四五日を過せしかば如何ゑせまじと思ひ屈しいつそ此方から治兵衛さんの家ゐ至りて面會た上委しく事由を咄したなら此身ゐかゝる疑念も解て嬉しき名古屋帶再たび結る縁の糸のもつれを解由しあるもやせんと思決めて支度せし日折よく兄の良助が打身の悔み愈として尋ね來せしを幸はひと兄妹種々評議の末良助は妹ゐ勸めて手紙を書せ丹を携さへて治兵衛の許へ尋ね行きて仔細を話しこの身の不注意を詫し上妹の濡衣をを乾させんと若糸より敦ねられし治兵衛の家へ尋ねてゆきしに豈圖らん

や店を鎖し賣家と記したる曲りし貼札見るさへ懶うく人影さへにあらざれば是はとばかり良助は隣家の人ゐ樣子を問ひ如何いふ事由かと尋ぬるゐ其人答へて去ばゐり治兵衛どのは先頃より相場の高下ゐ手違ひ多へ縮く損耗嵩むは借財ろの中にも馴染の娼妓眞田樓の若糸とかひへるを身受せんとて七處借り無算段の甲斐もなくその金さへ盗難に遭ひ身の方向も附きがたく借財の爲めに分散し家屋は債主の手ゑ渡し昨日當地を出立して東京の知己を便り旅の天ゐ趣むかれし氣の毒さよと告るを聞て良助は思ひ掛なき治兵衛の顛末現に定めおき盛衰栄枯水の流れと人の身の行衛定めぬ西東かゝる場合ゐ至りしも此身が折角拾ひ得し旦那の革靏をむさ〳〵と兄の毒手ゐ取返されし皆なゐ不注意より起りしをと且愧且呆れ如何にせまじと當惑の心一つゐ定めかね腕又ぬきて范然と空家の前に佇立て思按おげ首數回び嘆息の外なかりしが漸やくにして思ひ返し斯ては果じ妹ゐも此由つげて右ゐ左に計らう術もあらんかと進まぬ足を急かせて眞田樓へ取つて返し事の次第を物語れば聞より哭ッと若糸は別ゐ思按も泣くばかり夫れも道理此もさた道理なるを道理とて慰さめかねし良助はもろともに物思ふ重き頭を擡げつゝ涙の間ゐ右ゐ左と賺し慰さめ只管ゐ治兵衛の出京先を其處此處と心の限り問合すれど知る者とてもあらざれば所在は更ゐ知れざりけり是等の變事を物憂き事に思ひ屈

したる餘ゝや父右膳の長の病氣鍼灸藥餌の驗ゝく日を經るまゝに重くなり其年おきの中間に至り日に〳〵弱るばかりなればと良助はいとゝしく眉うちひらく由もなく若糸も貸席より暇を貰ふて親の病氣を看護のゝめ此の程家に戻りて在り良助は朝ゝ〳〵醫師許往還して兄妹とも〳〵湯液を勸め腰を捺つ四表八表の物がたりして病父の付然を慰さむるに思はゞ涙目に滿てやるかたなきを見る母は胸ふたがりて涙顔を隠すよしゝく鳴尾を撫てつかへゝ紛らかす親子迭ゝ思ふこと言ねどもしるき孝行慈愛心ゞ想像られたる右繕も最早是迄と既に覺悟やしたりけん頃は九月十三日妻のゝあきは言も更なり良助若糸の兄妹を枕邊近く招き寄せ苦しき息を吐きゝへゞ。妻は素より兄妹の我に仕へて夜の目合せず世ゝ憑もしき介抱を受ても卒に行く道の別れところは思ふなり今改めて最期の際に遺言く事の一條三人俱ゝ能く聞けかし今は昔し二十年以前家族もろともに江戸屋敷に在勤の頃未の娘兄妹が爲には實の妹が世ゝ嫌はる〳〵四十二の二ッ子ゝれば〻と藥の上より親知らずにて出入の町人芝口二丁目柳宿師紀伊國屋政右衛門といへる者へ養女に遣つたろの後は如何せしかと親子の情口に出されゞ心の中折に觸ては思ひ出し切ることかたき煩惱の縛にからむ血筋の同胞巡り合ふ日のありもせば力に成つ成られもし相談敵手とならんゝは双方の爲めゝも悪からじ心ゝ掛るは只此のみと呼吸

細る覺悟の言の葉もろきは袖の露霜ゝ弱り果たる秋の蝶片羽もがる〳〵思ひなる兄妹二人は差俯むき右左の言葉もかゝりけり

第七章

烏の將に死ゝんとする其鳴くや哀し人の將ゝ死ゝんとする其事や善し。次第ゝ細る玉の緒の今日を限りと思ひけん右膳は細やかに遺言しつ明治九年九月十三日享年こゝに四十八才ろの朝霜と共倡ゝ睡るか如く生氣絶たり妻のゝ秋は言も更ゝり良助若糸の兄妹は地に伏し天ゝくがれて紅涙袖溢れつゝ咽ゝ咽り伏轉び聲も得たてず泣き悲み前後正体ゝかりしが漸やくにして思ひ返し扨ゝるべきにゝらざれば力なく〳〵野邊の送りも形の如くに營みて跡ねんごろゝ吊らいたる貞婦孝子の心の中想像るだゝ哀れゝり去程に母のゝ秋も年頃日頃ゝず〳〵の憂目を重ねしろの上ゝ本夫に別れし氣落こや病とはなしに其年の霜月下旬是も亦果敢なく鬼籍ゝ入りしかゞ兄妹が悲哀は如何ばかり同じ年に父母を失なひ何とせん術ゝく〳〵もろの次の日の黄昏ゝ卒に棺を擡げ出して父右膳が新墓の側ゝゞ葬ける良助若糸の薄命ゝる多年の間千辛萬苦身を粉ゝ碎き苦海ゝ沈み看護介抱の甲斐もゝく一時ゝ父母を失なふて外ゝ親戚も縁潜ゞ身は是沖の捨小舟楫を絶たる浮沈み行末さへゝ思ばれて心細さも増長て嘆き孝弟全たき兄妹ゝしてかゝる

現世の苦しみを受るといふは前世の業が將因果かは知らされど現に天道は是なるか非なるか又是非もおき次第なり斯て後若糸は未だ前借のある身ゆゑ父母の忌服果るところのまゝ眞田樓ゑ立戻り辛き娼妓も誰が爲ふせん方おくも今はゝや身の憂事もいつしかに憂ふ馴ては憂しとせず泣て嬉しく有情の客を迎ふる夜は稀に笑ふて辛き輕薄の人を送る朝は多く一月餘りを過せしが有一日の事良助は眞田樓ゑ赴むきて若糸ゑ會ひいへるやう今は兄妹が仕へまつる父母とても世ゑ去りたまへば我もいつまで腕車を挽きかくてあらんも要なき業なり當地ゑ長くあらんより豫て聞知る東京は繁花の都會と言ふあればいつゝ彼の地へ遷むきて心の限り稼ぎおば又よき事もありぬべく又一つには出京されしと聞へしのみゑて居所も慥ゑしれぬ治兵衛どのや父が最期に遺言されし妹お政の所在をも尋ねて逢たく思ふあり彼の地へ至りて思ひ通り造化精妙て金が出來なば直に其許を廢業させ目出たく身受をすべきまゝゝろの吉左右を樂しみゑ今しばらく辛抱してと跡言ひさして苟且の別れを思へと思はぞもホロリト落す一トしづく涙ぞ人の誠ある兄の言葉を打聞く若糸外ゑ思按もあらざれば涙おがらゑ承知おし相談頓ゑ決りしかば良助は家ゑ歸りて僅に殘る手道具類を賣代なして旅費とし同年十二月の上旬旅の準備を整へて再たび眞田樓ゑ尋ねゆき若糸はじめ樓主ゑも別れを告げて懇切に

妹の上を頼みつゝ無事ゑをはせよ。恙おく歸りたまへと兄妹が一句ゑ契る辭別鼻うちかみし紙とゝもゑ思ひ捨てなほも濡す袂をやがてわかちけり勘て良助は妹ゑ別れ心殘して旅の大東へさして神戸より三菱漁船の上等ゑ乘込み一日二夜の波の上無事に横濱へ着船し夫より漁車に飛乘て七里を一時ゑ當地へ來り八丁堀岡崎町に翠小なる裏家を借り男一人の痩世帶商法せんよも資本はおし殊ゑおじみも薄き土地知己の人とてあらざれば獨りつく〳〵考がふるに挽なれたる腕車を挽き東西に奔走し南北を馳巡らは尋ねる人に回り逢ふ便を爰ゑ得られもせんと甲斐おき事を空頼め分慮頓に決りしかば或方より齒代にて一輛の腕車を借來り再たび車夫と成下り身よいつゝれを纏へども心に飾る綾錦府下の市街を馳廻り或ひは街頭に佇立て往來の人ゑ眼を注げど雲を捉へ風を追ふ目的もあらぬ人の踪蹟尋ね當べき術もおく似たる人にも合ずして空しく光陰を送るうち其年も暮れ翌れば明治十年の春とはなりぬ詰頭一轉且題彼の惡賓善太郎は弟良助が拾ひ得たる治兵衛の革鞄を掠奪しりなる金は夫々に仲間の者へ配當し殘る大金は獨りで占め化精妙と思ふ間もおく惡事千里の譬へゑ洩れず忽ち其筋の耳に入り嚴しく深偵さるゝと聞き高飛するのほかなしと一所不住の身はやすく旅の準備も入らばこそ肥後の熊本へ逐電おし金あるうちは爲す事もなく遊びくらして日數經るせゑ知己も

出來或人の問旋よて同所縣廳前の旅人宿中山何某方の雇人に住み込み深く我身の非を隱し暇休らしく見せ掛ていと健氣ふ仕へしかば雇主も桂庵口には稀なる者と眼を掛て使ふ月日に關守なく昨日と暮れ今日と過ぎ明治十年の春もやゝ一月中旬となりしころ有一日の事善太郎は所用ありて熊本なる清正公社の門前をうろ行なすをり權妻粧りの一人の婦人が清正公へ參詣ふしてかへり來たるにハタと行逢ひろの女をよく〳〵見れば髓は什麼にさきッ年大坂ふる中の島の病院へ置去にした女房のむ柳ふ擬ひあらざれば是はとばかり打ち驚ろき穴へも入たき心地すれど物佞利口の白徒ふれば明白に告名掛げ彼が心を試せし上またよき工夫もあるべきよと胸ふ一物善太郎心も付かで行過たるふ柳をやをら呼止め絶て久しき再會に無事な顏見て何より僥倖今更いふも面目ふけれど其許を病院へ入し後この身ふかゝる不慮の災難或人に頼まれて證書ふ加印をしたばかり思ひきや其人は詐欺取財の曲淚ふて東京にて捕縛れ其同類とこの身までとんだ寃枉の嫌疑受け同じく東京へ護送されろの道筋は巡査の守護に自僅の事を許されねば手紙一通そなたの許へ送り届ける術もなく知らせたいにも便を得ぞ知らぬ其詞はさぞやさぞ此身を怨みて居るならんと思はぬふはあらねども右の譯ゆへせん術ふく斯て東京へ護送の後ろの筋にて數度の尋問素より知らぬことふればこの身の光明はたちまち

ふ嫌疑晴れて放免され急ぎ大坂へ立返り何は偖おき病院へ尋ねて行ば其許の病氣はいつの程ふか全快して出院せしと聞知るみの今は何處ふ居ることやら所在も更ふ知れざれば嬉しくもせた本意なさふ左右の思按も出ざりしと言つゝ四方を顧りて薄き口唇瞥廻しふたゝび語りいぞるやう。其詞のありかのしれざるよりこゝろ當りをたずねたくも同所の知己はこの自分が妨疑の廉にて東京へ護送れたを誤まり傳へアノ善太郎奴は犯せし罪の發覺ふして捕縛れしがどう胡魔化したか旨く脱れ再たび戻り來たりしふりと夫から夫へと言傳へ交はる者さへ絶てふく忌み嫌はるゝ口惜さユ辨辨するも益なしと彼地を立退き故郷なる播州明石へ立歸り身を謹しみて居るうちに其詞を肥後の熊本で慥に見たと告る者ふり飛立つ程の嬉しさふ故郷を去て此地へ來り寐る間も忘れぬ其許に逢んと清正樣へ願掛て尋ね暮せし二月餘り旅費の金も遣ひ果し何とせん術なきまゝふ今は爰より程遠からぬ縣廳前の旅人宿中山方の雇人かゝる果敢ない身ふなつた苦勞するのも其許ゆへこの上逢ずは如何にせんと今日も今日とて清正樣へ無理ふ願の愚痴を述べ參詣し果て歸る折から其許に逢しは奇せぬ緣か但は神の引合せか何にせよ二世と契りし女房に偶々邂逅は逢ふがら見れば立派な權妻造り榮耀榮華ふ長の日を倦る旦那ふ圍はれて見る影もふく落魄た自己ふは言葉を掛るさへ定めて否ふふつたろう

トロから出任せ女を惱殺す當意卽妙奇代の佞辯お柳も不慮の再會に打驚ろきしが淺墓ふも元來惚し善太郎に言瞞着られて打解けつ燒ぼつ枕には付やすき火性ふ過ふ女の水性積る話しがありますと傍の料理店へ誘なひ行き酒肴を誂らへて酬つ獻へつ對座ふ柳は病院へ入て後絶て音信あらざれば扨は我身の業病ふ愛想を尽して淸情ふも飽果され し悔しさよと涙の乾く日とてはなく又病院ふては請人ふる足下が逃亡なせしより入院は許さぞとむづかしき掛合ふ有り詮方なくろの以前出稼せし田中屋の樓主に歎きて請人となつて貰ひしのみならず病院の入費何や角や万事厄介にありたる甲斐よさしも手重き業病も二月餘りふ全快し元の身体となりたるゆゑ其入費を償ふため且は恩義を報ゆるため再たび苦海へ身を沈め同家へ出稼ぎの娼妓となり夜毎ふ變る客足のしげきが中に程もなく大坂鎭臺詰の陸軍少佐何某ふ深く想はれ根引されて手活の花外妾と成果せ同所に居ること僅かふして旦那と頼む何某は熊本鎭臺詰を命ぜられ當地へ轉任するふ付き此身も俱に伴なはれ此熊本へ流轉せりと過越方を語り出て。足下ふかゝる災難のあるともしらねば今日が日まで僅は怨んて居ましたが始めて聞た冤枉の咎めさぞ難義でありましたらうト怨ずる言葉も艶めきて打ち解かるゝ繻子の帶絶し赤穗を今爰に再たび結ふ惡因緣怪しき中とぞ有りにける」期てお柳と善太郎は人の詠めの花盜人ふ

柳と怪しき中とぞ有り實の同胞ふりと僞はり表向き妾宅へ入込むのみか惡才ふ長し者ゆゑ何かに付け少佐の機嫌を熟つくろひ奴僕の如く仕へつゝ況てお柳も去る者ふれば二人の爲ふ眩惑さむ恨由ある中と爭てか知るべき一ト月餘り過すうち彼の西海に風波起りて賊魁西郷隆盛新政厚僅の反旗を翻がへすに及び熊本地方は忽まちに修羅の街の戰爭烈しく賊を間ゆる鎭臺兵籠城數十に渉りし後さしも手强き賊兵も順逆爭て敵し得ん勢はひ初めふ似ゝやらず熊本を引揚て鹿兒島地方へ敗走せしかゞ此圖を拔さぞ追擊よと軍機微妙き官軍の計議泊ちふ一決し何某少佐も鹿兒島へ出陣の命を受け進發の準備頻ふり善太郎は今回の戰爭に名ある敵の首ふと拾ふて功名せんものと心の機密をふ柳ふ語り何某少佐に隨從し俱に戰地へ出張の人夫に加はり頃は明治十一年三月下旬何某少佐は最愛のふ柳ふ心は惹れ合も軍人の身の是非もふく切るふ斷られぬ煩惱の羈をろのまゝ手綱とふし惡馬の足掻を迅めつゝ別れを惜む軍の門出必らぞ無事に御歸陣を兄さん去らばト言さ立てヨゝと泣伏ずれ柳の愛嘆心の中に思善太郎に別れともなき盧涙三人齋しく思ふ事各〳〵異ふる淚ひの分路別してこそは出て行く去程よ善太郎は運送方の人夫と　　仁一郎がふて植ふ口まで進み入しふ賊徒の猛勢再たび盛んふ同年七月廿九日官軍猛く打負て苦職のをり何某少佐は敵より打出す彈丸ふ五ケ所

の重疵を負たるまゝ果敢なく戰死したるより善太郎等の人夫さへ九死を出て一生を辛くも得たる恐ろしさお素より浮湖の善太郎は少佐の戰死を好機會とし夜に紛れて營所を脱出て熊本に逃歸りて後は毎日からずお柳の妾宅へ入込て夫婦の如く暮せしに少佐の手當耳かり去かば金あるまゝに遊びくらし兎や角おすうち西南事件も鎮まりて世は平穩にありお けり同氣求むる悪漢浮婦お柳善太郎の兩人は爲すともおく暮し居たるが坐して喰へは山も空去く何少佐の遺金さへ殘り少おにおりゝかばお柳は善太郎お談らゝやう馴染少なきこの土地に居らんよりは郷ろの事大坂へ歸らゝと促がされて善太郎ろの身に犯せし罪あるを流石お夫と打明けかね事お托つけ期をいばせしが左樣としらねばお柳はまた頻りと歸坂を促がすゆゑ數月を過たれば歸坂おすとも祟りはあらじと思ひ決めてろの年の十二月下旬家屋は素より家財道具を賣却おし二百五十圓余の金を携さへやがて大坂へ歸りしかど疵持つ足の底氣味悪く府下の住居は心おちぞと神戸居留地の近傍に世帶を持し程もおく專手を求めて善太郎は居留地百二十八番館の英人何某のボーイに住み込み英人の洋妾おかめといへる浮氣女と密通し再たび悪事を目論む話しは次を讀て知らねかし

第八章

有一日お龜は英人の何某にうち向ひ貴郎は何も御存知ないがお清さんは據てより俳優の中村珊瑚郎と貴君の碧い眼を盜み密通して居ることをしつて居るのは卑妾ばかり早くお耳に入れやうと思はぬお はあらねども證據もおい事を申しあげ婦人の嫉妬心より有らぬ事を讒訴するかと疑がはるゝが苦しさよ今日まで默止て居ましたがお清さんは膽太くも貴郎のお金を盜み出し珊瑚郎と欠落せんと密かに約束したるよしろの使を頼まれたは日頃正直の善太郎外の事なら兎も角も是は旦那の一大事捨おきがたしと卑妾へまて内々告てくれました委しき事は善太郎よりお聞おさいと焚付けられ素より短氣の英人は活と堰立つ怒の面色直に善太郎を呼寄て問ば此方は豫てより期したることゆゑ善太郎お龜の讒訴お尾鰭を添へ雇て堅めた一封の僞手紙を取出し是は此珊瑚郎よりお清へ贈る返書おりと渡すに受取り英人はお龜を去て讀ましめろの文意を聞くに金の出來しだい東京へ欠落する覺悟お て相侍ちをれば少しも迅く金の算段ありたしと事明細に認ためおり善太郎の僞筆おり鈍くもかゝる較計のわなお乘られたる英人は怒こと甚々しくお清の部屋へ跳り入り物をも言ず沓をもて突然室と蹴倒せば善太郎は走り寄り襟髮つかんで引据つ擊ゝら蹈やら無慈悲な責苦お清は何と言譯も身お ふりかゝる寃枉の濡衣乾ず德さへもおかくお詫れど歎けど外國人の一てつ短慮開はころ怒りお

任せて泣入るお清を情用捨もあら驚い小鳥を摑む如くにてお龜善太郎も俱に手傳ひ忽ち衣服をはぎ取て湯衣一ッの裸体となし荒縄もてひし〳〵と七重八重に縛り上げ密通したと白狀せよ言ねば斯して言はするぞと洋杖おッとり善太郎稍地金を顯はして此世からなる苛責の杖ろの苦しさに堪かねて身に覺なきことながら密通せしと白狀せしお清の無念さ如何ばかり思ひやるたゞ哀れあり旨く言つたと善太郎はお龜と顔を見合せて莞爾笑ふ笑ぼの中に刺を隱して尙左ゞ右と英人ゞ纔訴おし翌日宿元へ引渡し長の暇を出さんと縛りしまゝ一間の中へ閉籠め置しにお清は狹き女氣に思ひ迫りて覺悟を極めかゝる憂目を見るよりもいつそしんだが增ならめとろの夜辛くも一間を拔出て裏手の井戸へ身を投げ死したる事の大變をろの翌朝聞知りて深く驚ろき英人は如何にして宜からんか事わら立なば大變と今更悔めど詮術も亡骸早く取片付け後日の崇りわらざるやう計らひてよと萬の事を善太郎に任せしかば惡事に拔目內所の較計まんまと首尾よくお清奴に自滅させたば物怪の傍倖とかゝる事ゞは嘲たる白徒善太郎の計らひとして警察署へは豫てより逆上の氣味あるゆゑ夫々注意いたしをりしゑ昨日看病人の透を窺がひかゝる横死を遂ましたは發狂せしに相違なしと上を僞はる大膽不敵實しやかゞ訴たへ出しに秘密を知らねば誰あつてお清のために無實の罪を言解く事も死人ゞ口

なし又親元へも發狂の上非業な最期を遂たと告げ葬送の手當として幾干かの金を送り事故なく濟たるより善太郎とお龜の二人は思ふがまゝに邪魔を拂ひし心地はすれど非業ゞ死せしお清の事を思ひ出せば何とおく怖氣ざして快よからず況てお龜は毒婦といへど女心ゞ恐怖して其當座ハ密かゞお清の墓に詣で香花を供へ或は又家ゞ居る日もお清の爲ゞ人しれず念佛を唱へ居りしも日を經るまゝに忘れし如く姦夫善太郎と枕を高く密會おして居たりけり且說妻のお柳は過ぎし日お清に告られたる本夫の浮氣を聞しより悋氣の炎ゞ胸を焦し怨みのかず〳〵口說立しも口賢こき善太郎に說き破られて心ならずも物憂き月日を送り居たるが其後とても本夫の素振家ゞ居る日は稀ゞして用事もおきに出歩くのみか時としては商館ゞ三日四日も泊り込むおゞ何か浮付く樣子ゆゑます〳〵怪しみ或日の事脫捨ありし本夫の衣類他所ゞ寐て來た羽織の皺を胸の火伸て伸しつ疊みつ心もとおく袂の中を探り見れば艶書と覺しき一通の書狀あり取る手遲しと讀下すその文言には。孫て邪魔になる彼のお清を首尾よく無實の罪に落し追出さんと思つたに彼迅まつて死したるは腹病ぬ傍倖とは言おがら若し此事露顯せば二人が身の破滅ゞなるゆゑ足元の明るい內逃亡おすこそ上策ならんと事明細ゞ認ためたる女の手跡は正しくお龜扨は此身を振捨て逃亡おすと覺ゝたり是まで長く連添ふうち怪し

さ舉動をば〳〵ありしが斯る惡事をおす人とは今日が今でも知らざりし妬せしくも惜しさよと震ふ手先にろの手紙を寸斷〳〵に引裂きすて〻彼方を睨みて起たる有樣恐ろしなんど言ふばかりおしお柳はつく〳〵思ふやう事穩便に濟せんと双方の爲を深く思ひ親切にしてくれた恩はわれども怨なきあのお清さんをむじつの罪ゐ落すのみか責さいおみ自滅させたは取も直さず二人が手づから殺すも同じ草葉の影でお清さんは臭妾までを怨んで〻あらう後の祟も恐ろしやかゝる惡事ゐ罪深き人ゐ連添ふこの身まで如何なる難義に逢んもしれず彼のお龜奴ゐ見換られ苦去られしその後は外に寄邊も渚漕ぐ楫を絶たる捨小舟一人憂目を見るよりは黄泉へ赴むきてお清さんゐ此身の潔白を告げ去らせゐ詫するのがつみ亡ぼし賴母しからぬ本夫を賴み生じ生中長生居て生恥さらさば恥の恥さうだ〳〵と一筋ゐ思ひつめたる婦人の淺墓世ゐありといふ死神ゐ誘引たりけん告渡る入相の鐘も哀れを催ふし諸行無常の音すゐる逢魔ケ時の誰や彼天さへ曇る甲夜闇の暗きを幸はひ裏口より忍び出つ〻裏手の井戸ゐ身を倒さまゐ飛入て取おき最期を遂たりける是やれ柳が是までに造りし罪の報ひ來て假令へろの身は去らずとも連添ふ本夫善太郎の舌の劍ゐ自滅を取りしお清と同じく井戸に身ゐ投げかゝる横死を遂たるも因果應報と謂せくのみ斯とも去らぬ善太郎はこの夜おかめと睦し合せ英人の

金を盜ませて密ゐ商館を誘引出しろの身は頓て家ゐ戻りゐ柳を欺むき目ぼしき物を持出して賣拂ひ夫を旅費ゐ高飛せんと戻りて見れば門も鎖さず灯火も見へず人影もあらぬ樣子ゐ怪しみなからゐ柳〳〵と二聲三聲呼ど返詞もあらざれば疑がひおからも我家の案内兼て知つた手探に火鉢の傍へ摺寄つてマッチ取出し灯を點し四丁を見れど變りし事おし偖は何か用事ありて留守も賴まず他出せしか捨も折とて好機會この間に早くと金目の物かき集めんと納戸の中へ入んと踏出す爪先ゐ障る手紙は何なるかと捨ひ上つ〻能く見れば正しくお柳の自筆にて書置と記しあるゐ流石無賴の善太郎も是はとばかり驚ろき果れ封じ目とく〳〵讀下せばお清を無實の罪に落し自滅を取らせし始終を委しく記せしろの末に本夫惡事に愛想が盡き連添ひ居らば末遂に如何ある憂目に逢んもしれず浮氣女のお龜奴に見換られたを幸はひに身を投て死まする臭女を憫然と思しめさばどうぞ心を取直し誠の人間になつてたべ死出の旅路の氣掛はこの事のみと文言短かくいと哀れ氣に綴りたる筆の命毛今日限り絶る緣と死別れ性は善なる懺悔の遺書見れば浮湖の善太郎も心ゐ掛る景色もおく偖はこの身の舊惡をもお清を殺せし一點より薄々悟つて家出せしが然すれば今頃はゝや死せしか夫とも警官ゐ見咎められ助けられしか何にもせよ猶豫おさば足元から鳥の起つ禍災あらん三十六計逃るゐ手おしと

我物ながら持出す暇なく急き戸外へ飛出し豫て待合したる場所にてふかめに逢ひろの夜は其家に一夜を明し一先の事など談合し漁船に乗て東京へ逃亡せんと思ひしに折しも出帆の都合あしく四五日經されば東京へ向け抜錨する漁船なしと言れてはと〳〵當惑し便船を待合すため四五日茲ふ過すうち追手の者ふ捕へられなば此迄辛苦の甲斐もなしいつろ陸路を腕車ふて馳去るこそよからめと思ひ決めて腕車を傭ひ布衣深くうち掛て人目を去のぶ落人の木にも芽にも心を置き東海道を下り旅日數經て遠州なる濱松驛まで來りしかば二人は漸やく心落付き茲まで來れば大丈夫もはや追手の氣遣ひなしと旅珍らしきふかめの勸めに行向を急ぐ旅ふらねば道すがらの神社佛閣名所古跡を見巡りて一日借かふ五六里の道を歩きて宿りに付き迎り〳〵て金谷驛まで來り着き同宿の十一屋といへる旅籠屋ふ泊りしが此旅籠屋の主人喜藏といへるは以前は有名き目明にて今尚其筋の探偵掛を奉職る者ゆゑ蛇の道はへびとやら二人の素振の何となく怪しき樣子ユ迅くも眼を注け探偵さるゝと知らざる二人此家ふ泊り奥まりたる一間よ入り草臥足を踏延し下婢の案内に連られて二人齊しく風呂場ふゆき入浴の間に主人喜藏は怪しき者と睨みし眼力跡へ廻りて旅荷物を改ため見れば四百圓餘の大金を所持なすのみか左程富貴の人とも見えぬに金遣ひの荒き樣子欠落者か左もおくば盗賊を働らく

曲漢ふらめ宿帳へは東京者の夫婦連と記したれど言語は國の切符とか中國邊の訛り何調夫是以ていと怪し要ころあらめと元の如く旅荷物を片寄ふき障子立てきり店の方へ樣側傳ふて出行たるを知る者絶てふかりける頃てふかめと善太郎は入浴しはてゝ坐敷へ戻り酒肴を取寄て程よく飲て醉を盡し男女ひとしく床に入りほんの旅寐のかり枕嬉しき夢を結びもあへず其夜十時と覺しきころ隣坐敷に泊り合せし商人体の旅人二個密に起出て身支度なし襖の影より内の樣子を是彼齊しく差覗き囁やき默頭合ひ襖からりと引明て跳り込んたる暗號の物音店の方より駈來る主人の喜藏も身輕の出立三人俱々聲振立て汚用と呼はる聲ふびつくり南無三ッキが廻つたかと跳起ながら善太郎肌身放さぬ準備の懐剣抜手も見せぬ先に進みし一人の探索が眉間を丁と裂斬ば苦と叫びて蹌跟く足元性むを得たりと一生懸命右左より擊て掛る喜藏と今一人の探索を當るふまかせて斬立る刃の光に猶豫ふうち片足あげて枕元ふる行燈ハタト蹴倒ば灯光は消て具の闇是は唖か便を得たる兇暴無頼の善太郎傍に置し旅行李を左手の脇に引つ抱へおかめの浮沈を顧ふ間もなく雨戸蹴開き庭へ飛下り彼方の塀を乘越て己が黒事の暗まぎれ辛くも現場を逃げ延つ足に任せて山道傳ひ秋葉路さして分登り早や四五里も來つらんと思ふころ夜はほの〳〵と明けふけり扨も危うき事ふりきと松の株ふ腰うち掛けホ

ッと一息吐きあへずおかめは如何にあしつらん捕へられえか逃延しか爰は何處か玄ち雲のかゝる山路へ逃入しか方角さへに定かならぬ山又山の山續き如何にして宜からんと腕叉ぬいて茫然と思按あすをり彼方より人の來る足音ゐ見咎められじと善太郎樹影よろの身を潜ばせて何人なるかと窺がへば綠の黑髮ふり亂し喘ぎ〳〵駈來る婦人は是則ち別人ならぞ亦彼の毒婦おかめあり思掛ねは善太郎急ぎ木陰を走り出で其許はおかめどうして此處へと呼止られて驚くおかめ「思ひ許ぬ捕手の難義お前が先ゐ逃出た跡追掛て捕手の人の居なくおつた透を窺がひ私しも彼處を逃出し偖途もおしゐ走りしが此處てお前に逢といふも盡せぬ緣の丸木橋危うい處ろ一ありましたと咄すを聞て善太郎「双方の無事は目出たいが肝心要の旅費の金置て來たゆえ是かゐ先行も歸るも詮術がねへト言ばおかめは冷笑「其處等に如才があるものか子逃出す時旅費のお金は私しの身体ゐ付て來たコレゆ覽と懷中より胴卷取出し差示せば善太郎は笑坪に入り「流石はおかめ大出來〳〵金さへあれば大丈夫少しも迅く逃延んと脛ゐ疵持つ草臥足引ずりおがら里ある方へと當途もおしゐ四五里の道を飲ず食はて走りしことゆえ心神倶ゐいたく勞てはや一歩も進みかたく斯る時の準備にもと流石は悪黨善太郎道の傍に休らひて旅行李を打開き中より取出す松魚節れ龜ゐも與へ自分も喫へ飢たる腹を肥つゝ嚙

りおがらゐ逃走り行衛もしらぬ白雲の山路を出て里ある方へ趣ひかんとて急ぐものから踏迷ひしか行ども〳〵里ある方へは出ずして言問ふ人も嵐ふく峯の松風音淋て溪間を流る水の響兎や角なす内日は暮て天さへ曇る暗の夜の一寸先も見え分ぞ行も歸るもあふ坂の山越す術も盡果しが大膽不敵の善太郎更に恐るゝ氣色おく弱るお龜を勵まし立て暗き山路をたどりつゝ又十四五町走りし程ゐ猛きやうでも有撃は女子お龜は痛く怖ぢ恐れお清の死せし事なぞ思ひ出し又道すがら善太郎の咄しゐ聞しお柳の横死ての身ゐ怨みかゝる時もし幽靈ても出はせぬかと後見らるゝ心地しつ踏む足さへも地ゐ付ぞ善太郎ゐ寄添て口の中にて念佛を唱へおがらに迫る折から傍に高く聳へたる松の稍ゐ梟鳥のギャート叫びし一聲に怖氣付たるおかめゝ仰天駈出機會片足を躓き辷らして堪るべき底とも分らぬ千壽の谷へ身を倒しまに落入て生死もしれずなりにけり咄嗟とばかり善太郎救はんとすれぞ力及ばず谷底を差覗き聲を限りゐ呼べど叫べど木魂の外に返答おし素より浮薄の白徒なれば左のみ憫然と思はぬのみか足手纏の無おりしを喜こぶものから如何ゐせん旅費の金はおかめの腰ゐ殘ず付て置しゆえ金ゐ心は殘れども詮術おきまゝ扨捨て漸やく里ある方ゐ出て百性家の軒に佇立みて翌るを待て着換の浴衣煙草入など買拂ひ少しの金を調へておかめの生死を聞定めんと四五日此處ゐ逗留な

すうちお龜は其夜即死せしを翌朝樵夫が見付出し其筋へ訴へしより檢死のうへ死屍は假埋とされ道連あらば訴たへ出よと報告ある由を聞きさも太も善太郎は警察署へ出掛てゆき道連おる由を訴たへ出しに元來其方は何者なるぞと來歷素性を取糺され胡論の答へ往々あるのみか曖昧の廉數多く怪しき奴と警官の鋭どき眼力淨玻璃の鏡は曇らぬ明治の聖代天網爭でか逃れ得ん嚴しき詮議お包むを得ざ終に舊惡露顯なし三重縣安濃津裁判所おてお調べの末、懲役十年の刑に處せられ心がらなる苦役中昨年の三月監獄署おて死去せしとぞ

因お云惡漢淫婦が終焉を善くせぬ惡因惡果の物語は此一段おて局を結び咄頭一變て次草より治兵衛良助若糸們の身の上に說及ぼさんとす今暫らく御退屈を忍びたまひて大團圓までお讀の程を願にゐん

第九章

話柄復且說中西治兵衛は身の方向もつけがたき負債の爲めゴ住馴しよしおし草の涙花を立退きさして行衛は鷄が啼く東京へ立出て蠟売町の米商おる米倉一平の支配人笠部何某とは僅の内緣あるにより同人を便りて同町二丁目に家を借受け豫て手馴し米相場の業に就き今一旗飜かへ去先途の失敗を挽回さんと進退鋭どき米商の開運の時機

來けん賣ば下り買ば上るトン〳〵柏子ふ仕合よく瞬たく間ふ數百金貯はへる身とおりたりしが只一方の米相場をのみ頼として居らんより何か確乎な商法をと思ふ折から其年は武州八王子青梅邊の繭の出來が非常によく生糸の格價の安いと聞き去らば同所へ趣むきて手の届くだけ買込て横濱へ持行き外國人ゴ賣捌かば思ふがまゝの利益を得べしと商法向ふは素早き治兵衛千圓餘りの資本を整のへ同所へ仕入ふ行ふる際旅の鬱を晴さんと布田驛の貸坐敷玉屋方へ登樓しお若といへる娼妓を敵娼とし一夜の春を買たりしが風の變つた面白さふ四五度遊に行くうちに同家の娘か厄介か常ふ樓中を立働らく二十前後の眉目よき婦人を折ふ觸てはは見掛けしが見ば見る程馴染重れし眞田樓の若糸に似たとは愚か瓜二つ割て其儘生寫若や姉妹ふあらざるか併し苦糸に妹ありとは聞かざりし何にもせよ折がなあらば尋ねて見んと或る一夕敵娼ふ若と閨の中寢物語りの事の序ろも彼は如何あるものぞと問ばお若は答ふるやうアノ娘はお政と呼びてまた身妾が此の樓へ出稼ぎぬ前の事とか深い樣子は知りませぬが四五年前此〳〵の親方が上州伊香保の温泉へ湯治ふ行かれたろの時に憫然ふ娘ゞとてあの娘のために善からぬ人に手離の金を與へて家へ連歸り娼妓ふしたり妾ふ出しては俠客と人ふ立てられる己の顔が潰れると背堅ふの親方ゆゑ娘分として相愬の縁があらば嫁に遣らうと厚い世話

嫁入盛りの年齢なれどとかく長し短かしとまだ緣談の口も決らずアヽして働らいて居りますがとんだ氣立の良い娘身妾等までにも優しくしてよく氣を注てくれますと話すを聞て點頭く治兵衛ひよんな事より腹立まぎれ譯も聞ずに別れし後深く未練の殘り居る彼の若糸に似た姿に床しさ勝る愛情の遣る方おさまゝ思按を決め翌朝旅宿へ立歸り夫より四五日經て後再たび玉屋へ登樓し樓主に面會てお政をば我が妻ふ貰ひたき由を相談ふ合ひしに汗も此玉屋の主人と言るは男の中の男一匹關東扁指の俠客と音ふ聞ゑし親分株彼の小金井小次郎なり娘分のお政をば治兵衛が妻ゴ望まれて默頭ながら答ふるやうふ外あらぬ貴君のお望みゆゑ隨分俱に進ませうが先づ一通り彼の娘の身の上事長くとも聞て下せへ先年私が伊香保の温泉へ湯治に行た歸り掛け兄弟分の因故ある安中驛の男立岩村文三方へ音信て同家ふ久しく逗留中或夜文三の子分岩松といふ者が一人の小娘を連歸り文三ゴ向つて話すを聞ければモシ親分聞なせへ今私が賭場から歸り道流れに添た土手の上より南無阿彌陀佛の聲もろとも此娘が身を投んと危うい場所ゴ行合せ見るに忍びお助けてやりとういふ譯で死ぬのだと仔細を聞ば此娘の親父といふは東京の芝邊にて其以前刀劍の拵巻師を渡世として可也ふ暮して居た處ろ現時廢刀の世中ゆゑ家業を失なひ彼是とその心配が積り〳〵て敢なく死んだ其跡に殘るは借金と此娘

のお母婦人二人で詮方も泣く〳〵少しの知己を便り母子とも〳〵此安中へ來りて見れば情おや尋ぬる人は何れへか移轉りて行衛しれぬ母子は今更途方に暮れ頼む木陰ふ雨洩る心地據どころなくお母は或人の世話するまゝに此驛の貸座敷松本樓の二階廻しに住み込みしがまだ其頃は此娘も十二三の少女ゆゑ豆どん代りに働らかせどうやら斯やら四五年餘り經とはおしふ過すうちふ母は煩らひ付き次第に重る長の病氣引渡すべき親戚もおければ同家の主人が表向き親切に介抱なす心の中ふ較計のありとは夢更思ひ掛ず厚き看護の甲斐もなく先月下旬お母は行て歸らぬ冥土の旅立ち藥餌の代から埋葬の手當萬端二百圓餘入費の金もかゝつたからうの償ひに此娘をば娼妓にすると樓主の詞始めて顯はす較計のゆおにかゝる難題ふ行詰り母に分れて悲嘆の涙も未だ乾かぬに思ひ掛ぬき樓主の詞にお政は何と返答さへ差伏むいて居る傍から義母のお角が摺寄てモシれ政坊ふ前のれ親母が親方のふ世話ふなつた恩返し娼妓になつて稼ぐが宜敷つて居るのは不承知かエー強情ふと威しつ賺しつ是非とも娼妓におれと言れ娘心の一節に浅ましき事ふ思ひ詰め苦海の淵ふ沈むより流れも清き此川に投身おして亡母の跡をしたふて死ぬ覺悟と語るを聞て憫然ふ思ひ親分に告たなら又分別もわらうかと死なんと狂ふを無理ふ引止め斯して連て來やしたと岩松の咄すを聞き文三も名代の俠客弱きを

扶け強きを挫く私等が仲間の規則ゆゑ其夜の中松本樓へ人を以て掛合せしふお政が給金の前借から諸入費迄百二三十圓の貸額ありといふ如何にもして助けやりたくは思へども文三は差當り手元の不都合僅かの金に差問へ當惑の体を見ても居られぬ其借金を私が購のひて政の身体を貰ひ切り娘分として相應の口を捜して縁付けやらんと文三と堅く詞を契へ同所を出立おす際私しが氣姓を知らぬ者は娼妓に賣るか妾ふ出すか二百圓は堅い代物親切ごかしふ僅少な金で連て行くとは堀出物と言はれたとさへあるおれば貴郎が生涯見捨おふ女房ふしようと被仰るなら私も一番張込で立派ふ嫁入させませうと異議なく承諾く小次郎が長物語りに喜こぶ治兵衛先年小次郎お政の爲に辨償ふたる百三十圓の紙幣を包んで水引掛け是を當座の結納代り小次郎は其金もてれ政に嫁入の支度させ縁談順に整のふたり斯て治兵衛は商用を果し歸京して後お政をば蝋売町の家に迎へ取り妻と呼び夫と呼ばれ目出たく夫婦となりたりしが此れ政ころ五十嵐右膳が最期の際ふ遺言せし四十二の二ッ子おりとて親知らずに遺たりといふ末子の娘にて血肉を分た若糸の妹なれば客観の似たるも更々無理おらぬ治兵衛は斯と露知しとず只若糸に似た婦女を妻におしたる不思議の喜こびお政もまた憂き旅路に母を失なひ孤子の便り少おく死なんと〻て思ひ迫りしこの身をば救ひ呉たる嬉さに心をこめて仕へし

かゞ夫婦中さへ睦ましく至つて無事ゐ暮せしが勝ば大盡負れば乞食瞬たく間ゐ身代を起すも潰すも相場の高下不圖した目的違ひよりする事爲すてといすかの喬と齟齬ふた る損耗續き一時は二千圓餘の身代となりたりしも昨日に變る今日の有樣嵩む借金續く は損耗果ては家作も人手に渡し是までの因緣を以て米商會所の帳付となり漸やく口に糊する位ゐ手掌返と有異轉變夫さへ永くは保ち得ず去る明治十三年二月中兜蝦売兩會所とも營業停止の嚴達ありて忽ち活路を失なひつ何と計術盡き果て深川大島町へ移轉り果は人力車挽とまで零落し我身ゐ耻てれ政の親分彼の小金井小次郎方へも絶て音信せぬものから小次郎も又他事ゐ紛れ治兵衛夫婦の事はしも音信のなきは無事ゐるゆゑと其儘ゐ打過しゆゑ斯まて夫婦が零落しを知る由絶てなかりしとぞ扨も治兵衛がお政を見染て妻に娶りしより此段に至るまでの年月を算ふれば明治十年の四月より同じく十三年の末に至る物語としりたまへ斯て治兵衛は翌年（明治十四年）の一月下旬より寒氣ょ犯され荷旦の事と思ひしに人は病の器とか次第に重る危篤の病氣妻のお政は憂か中ょもまた一層の苦勞を塞し良人の看護活計の工夫軟弱き婦人の手一つに煎じ詰たる痩世帶心尽しの甲斐ありて其年三月中旬ゐ至り治兵衛の病氣は愈たれど一つ叶へば又二つ三ッ四ッ五ッ六ッかしのせちせち辛き世を渡りかね良人が長の病氣のため醫師の藥

禮を始めとして米屋薪屋の拂ひより店賃までも滯てふり身の方向も付ざれは夫婦俱々相談の上お政は或人の周施ふて富ケ岡八幡社の境内ゐ二軒茶屋とてしゐせの料理店松本ゐ傭れて幾干の給金を前借して夫々の負債を濟せ治兵衛は元の如く腕車を挽き脇目も觸らず俱稼き稼ぐゐ追付く貧乏なしと世の俚諺も宜なる哉活計向もおひ〳〵ゐ樂にあり此分にては小商賣の資本位ひは出來るであらうとます〳〵心ゐ勵みが付き互ひに慰さめ慰さめられ又來る春を樂しみに身の憂事も憂とせず怠たり嘗てあらざりける

第十章

去程に其年の四月一日より上野公園地ゐて内國勧業博覽會の開設あり世ゐ珍らしき勧物あれば府下の人民は言も更ゐり各府縣下よりも縱覽人夥たゝしく來集し殊さら賑はふ由聞傳へ治兵衛はやがて腕車を挽き上野三橋の片傍ゐ客待ゐしてありたるゐ折よく客の出來しより乘車させんとしたりし際同じく客待して居たる三四人の車夫が口を尖らし眼を瞋らし今挽出さんとする治兵衛が腕車の楫棒押へて動かせず。何處の馬の骨だか知らぬへが己ッ達が定場所へ來て客を拔れて堪るものか其客人は已達が闘ゐする から何處へゐと空車を挽て行きやアがれと天窓ごゐしゐ罵しられ流石の治兵衛も憤然として。そんな規則があるかはしらぬを謠ひてんで出來た仕事ゐ前達が横合から彼此

いわれる道理はおいト半分言せず異口同音に生意氣な事を吐えやアがるなと言つゝ一人が足を揚て治兵衛の腕車を蹴返せば殘る車夫等は冷笑ひ。まご〳〵すると車も手前も徵塵ふするぞと傍若無人治兵衛も今はこらへかね話し合ても分るのふ商賣道具の人力車を何で足蹴にしやアがつたと言せもわへずわく車夫が四五人一時に右左前後より擊掛り治兵衛を中ゑ取てんで闘や鉄拳の滅多擊力限りふ防げども四人に一人殊に又病氣揚句の弱りし身休果は大地へ引倒され喧嘩に冠る笠はなく身ふふりかゝる不慮の災難折あしく巡行の巡査もあらず此詰局は如何おらんと思ふ所ろへ通り掛り〻一人の車夫が見るに見兼て仲裁ふ入り憎しと思へど四人の惡車夫が只管詫入り治兵衛を助け衣に塗れし砂など拂ひ疵所を勞はる厚き深切治兵衛は地獄で佛に逢ひ厚き情の禮おど演べ二人齋しく空車を挽連おがら神田をさして行く道すがら彼の車夫は治兵衛の姿をつく〳〵見遣り。何處のお方かしらなひがとんだ災難ふに合おすつたあんお車夫がある計りで車夫とさへ言ば一般で惡者と思はるゝ口惜され前さんの人品を見ても貧去き人とも思はれず厄かながら此私そ以前は立派お士族ふて維新以來は家祿を奉還し一度商賣を始めしも兄一人の不所存から瞬たく間に產業破れ明石の住居も成りがたくよしあし草の浪花よ彷徨ひ貧苦の中にて父母の煩らひ憫然や妹は川竹の流れふ沈み此身は又

車夫と迄成下り挽もなれざる力業せち辛き世を渡るうち種々の事のあるものにて未た彼地ふ居る時分三の宮の停車場より乘たお客は娼妓となりしが我妹の馴染客とは神おらぬ身の知るよしなく降て湧たる不慮の災難その客人が持參せし三百圓の大金を革鞄のまゝに人に奪はれ此事より妹までとんだ濡衣を着せられて言合されど諸俱ふ死なんとまで覺悟せし心を旨から取直し其客人に言譯おし身の疑闘を解んものと尋ねて行ば其人も嵩む負債ふ身を置かぬ逐大同樣との東京へ出立せしと聞て驚愕妹の爲には大惡人この身のためふは被害者おれば俱に東京へ趣むきて巡り合ふ日もおるならば是等の始末を告んものとこの地へ來りて數月以來その人をたずねれど今ふ少しのたよりも得す心苦しき限にてそと問はずかたりの一伍一什きいて夫かとをどろく治兵衛とどろく胸を押鎭めモシヤ苦海へ沈みしといふお前さんの妹御は若糸と言せぬかと問返されて彼の車夫は夫をどうしてお前さんが面目おいが此私はお前がたずぬる治兵衛の果ろんなら貴君が治兵衛さま箇は〳〵什麼にと稍暫し呆れて詞もおかりしが妹が許へは三日にあげずしげ〳〵お通ひおされたさうだが斯申す良助は三の宮の停車場ふて始めてお俱したばかり殊に其夜は甲夜闘ゆゑふ顏も祿々見覺ゑねば雲を當なるたづね物と思ひきや先刻の喧嘩が求めてもおい双方の僉俾恩はぬ人ユ巡り合ふ離合は天おり將命な

りと愧らふ治兵衛歡こぶ良助何はともあれ此年頃たづぬ申した甲斐あつてお眼ゐ掛るも蓋せね御縁この由妹に知らせやりなば左こそ歡こび思ふべし九尺二間の裏家おが
ら是から直ゐ私くし方へと八丁堀の我家に伴ゐひ獨身者の事ゐれば向ふ三軒兩合壁に
留守の禮など演畢り財布の中より取出す鍵早くも錠をこじ明て治兵衛を上座に請じつ
丶柴折りくべる竈の下獨り働らく客設け正賀〳〵しくも管侍ける扨て良助は治兵衛ゐ
對ひ妹の志操は言も更ゐり我が不注意より大切の革靈を兄ゐ掠奪され種々の艱苦を嘗
るまで委しく辨解したりしかば治兵衛も今は疑がひ晴れ心配ひの厚きを謝し其日はろ
のまゝ歸宅ゐし其後互に往來して問つ問れつせしものから治兵衛は若糸の心ゐ羞ぢる
良助ゐ對してはお政を妻に持しとは深く隱して告ざるゆゑ良助は斯ともしらず度々治
兵衛方へ訪信しもれ政は松本樓へ傭はれて家ゐ居ざれば逢ふとゐく其まゝ光陰を送る
うち良助は治兵衛が斯く零落しもこの身の不注意且は又兄の不所存より起りしこと慮
も積りて山とゐる比喩もあれば如何にもして金を調のへ治兵衛に償のひ還附さんと思
ふ心の切ゐるより若糸の許へも此等の由ゐ委しく郵書ゐ認ためて報知やりしゐ若糸は
且歎こび且愁へかゝる時ろ思返しと娼賣の中より心を懲し或ひは三圓乃至五圓と折
々治兵衛方へ送附越しろの貧苦を助けしかば少しは活計も樂ゐゐり聊さか心を慰さめ

て昨日と暮し今日と過ぎ明治十四年も空しく暮れ翌れば明治十五年の春も中旬とゐり
ゐける話頭一轉て若糸は兄良助より告越たる郵書を讀て治兵衛の安否を聞知りたるよ
り如何ゐもして苦海を脱出て東京へ行き妻と呼れ夫を侍づき手鍋棍ても好た同志供稼
ぎして暮したいと只一心に思ひ詰め他目も觸らず稼ぎしかば僅の中に前借の金も返濟
して今はしも自由の身体となりたれど道遙なる東京へ女の身ゐて一人旅流石ゐ心細き
ゆゑよき折もあれかしと待ば海路の日和とか吉原の貸座敷中米樓の主人が坂地娼妓を
抱へんと同地へ來りて眞田櫻へ出稼の松鶴雛吉といへる二人の娼妓を倉換させる相談
決り日ゐらず東京へ歸ると聞き若糸は大いに喜こび松鶴雛吉とは傍輩ゐて其中も睦ま
しければ事由を話して只管ゐ慫めば兩人ば承諾て中米樓の主人に話し俱ゐ連立ち神戸
より三菱漁船に乘こんて恙無出京せしは去十五年三月の末にて一同中米へ安着しそれ
より若糸は中米の主人は素より松鶴雛吉の二人にも別れを告げ孫て郵書で聞知りたる
八丁堀ゐる兄良助の家を尋ねて兄妹が絶て久しき對面の哀歡交〳〵胸に迫り嬉し涙ぞ
先立けるその有樣はくだ〳〵しければ看客よろしく察したまへ心せくまゝ若糸は直に
も治兵衛方へ尋ね行かんと言を良助おしとゞめ朝ゐ出て夕ゐ歸る我に齊しき車夫ゐれ
ば突然尋ねて行つたとて留守ゆゑ逢ぬは知れたこと殊ゐは獨身者の事ゐれば何かに付

て不都合ならん暫らく待ねと若糸が出京したる顛末より尋ね行く日を定めつゝ委しく郵書に認ためて治兵衛フへ報知やりたれば治兵衛は推き若しも此ことゝ政ゥ知れたなら嘸や不實と怨むべくまたゝ政を我妻ゥ持たる事の若糸はじめ良助ゥも知られゝば我身のためゴ盡しくれたる親身も及ばぬ親切の情ゥ對して濟がたし斯く俄におるとしりあばゝ政の事若糸の事互ゥ夫と打明て告べきもの今更ゥ言出かねて今日が日まで默止しことゝの悔しさに偖如何にしてよからんと義理と情の板ばさみ心一つに定めかね當惑の外おかりける兎や角なす中若糸の問くる期日となりしかば心おらずも家業を休み大島町の詫住居に今や尋ねて來るおらんと待つ嬉しさと氣遣しさ思ひゴ同じ若糸も年頃日頃死ゥふとまで思ひこがれし吾が情夫ゴ逢見るとの嬉さに心もいろ〳〵急ぎ足兄良助に誘ゥはれ尋ねて茲に入口の九尺二間の破戸を引開け。治兵衛さん。オー若糸能ころ尋てきて呉たゝ前も無事て跡言さし何から先へ言ふやら積る思ひに迫來る涙脆は女子の情以前の姿に引換て顔も窶れ手足も垢じみ落魄果しお心配ひ御痛はしさよと言ばゐに岩間の石水涸々に流れ定ぬ盛衰榮枯治兵衛も又若糸の襤衣姿ゥ引換て堅氣粧の美しさ泣腫したる眼元の愛敬永の年月我身のため痛く苦勞をせしと見ゐ何處ともおしに窶し樣子松の操の色替て枯木で花咲く此場の對面別後の事を語りつ問つ或ひは詫び

又は怨み哀歡こも〳〵集ひ來る盡せぬ緣し盡せぬ話し記者の短かき筆を以て逐一ゴ述盡さんは中々ゥくだ〳〵しければ畧しぬ間話休題ゥ此日より若糸は治兵衛の家ゴ止りて俱に暮と主張を治兵衛はゥ政の間を憚かり事に隙托け漸くゥ共日ハ良助共倡に八丁堀の家ゥ戻しやりぬ去程ゥ若糸は出京する時乘付ぬ漁船に搖れて持病の血の道差込む積の堪難きも治兵衛ゴ匿ぬ前までは只管逢を樂しみに張詰居たる勵みあるゆゑ差して障もおらざりしが念願屆きて其人ゥ逢て嬉しく鬱ぼれし胸の憂雲晴れ渡り心弛みのせしゆゑにや翌朝より枕上らぬ箇は大變と驚ろく良助早速最寄の醫師を招き診察を乞たるゥ全たく漁船ゴ搖れたる荷且の病氣なれば心配するゴは及ばじと言れて聊さか安堵せし折から治兵衛の訪來しゥぞ俱に若糸を勞りて四方八方の咄しの中治兵衛は心ゥ思ふやうゥ政の事を隱すとも晩かれ早かれ知れるは必定いつそ打明け語らんかと口の先まで出たれど何分ゴも言後れ一寸逃れの手段を考がへ良助に對ひていへるやう郷らる〻通り私しの住居は九尺二間の裏長屋脉を入る〻が漸やくゥれは何れ其中家を搜し轉居らんと思ふゥり其際若糸も引取るべけれは夫までどうぞ待て下され始めて妻を聚ることゆゑ何は無くとも心ばかり婚禮の式も行ゥひたしと言は良助頭りゥ點頭き夫ゥは恰ど宜い相談と膝摺寄。今更言も面目ないが先年貴君の大金を失ゥいしも我が不注

意夫ゆゑにころ今の浮雛義責て半額も償のはんと此年頃辛苦せし甲斐ありて少しは貯へも出來たれば相應しき空家を捜し寵を二つにするよりは三人齊しく同居おし兄妹夫婦水入らず私は手馴れた腕車を挽き足下はおにか小商ひと謀ちふ傍から若糸もことばを添て言るやう。ポンお兄さんの言通り治兵衛さんは商賣上手私しもともに共稼ぎ及ばぞおからぞうがおして元のすがたにむさせ申したく娼賣の中に稼ぎためた少しの資本もゝつて來ました右ひだりより兄妹が昔時を忘れぬおさけの相談かくまで我を思ふかと思へばなほ更おまさのことを打明かねて右思左思この上は如何樣ともお前等のよいやうに決して否やは言ませぬと程よくろの場を言なして我家に戻れど後のことのみてゝろに掛りて思按おげ首かくて四五日經しのち久し振よて松本より妻のおまさが戻り來て何かいろ〳〵治兵衛の顔うち見て莞爾笑を含み多分お留守とをもつたに能く家に居ておくれだ早くお前さんに嘶してよろこばせうとお内室さんにひきを貰ひ二三日泊り掛で來ましたと四下を詠めて莞爾〳〵云おがら。お前一人てお在だから家中の汚ないことチッと掃除でもお云なぬへ此樣子では糠味噌も大方うじか湧たであらう是だから私しが側に居ないとホントにモウいけないねへと憂しきが中にも情男を思ふ眞實面お顯はれていと睦まじき夫婦中餘所の見る目も羨ちやましい治兵衛も同じく笑

ひおがらたま〳〵家に歸り早〳〵そんなよ叱言を言ふことかは歡こばせるとは何のことご早く話して聞せおせへと問はれてお政は頻お默頭きマァお聞よ昨日の晩方新橋の藝妓衆を四五人連た官員樣のお客が來て陽氣お坐敷ろの中で一人の藝妓がわたしお對ひお前へいつぞや此卑女が茲の不動樣へ朝參りに來たときまだ一月の寒天お素足で霜を踏碎きお百度を上てれ在だか感心な事だと思ひましたと話す傍から口々お思ふ男と添遂る信心參りか左もおくば情夫の病氣を愈す願掛てありませうお羨やましいのお樂しみのと一座擧つて面白半分おぶらるゝのが蒼蠅ゆゑ他の女中にお座敷を取換て貰つた處ろ其女中が私しの身の上お前が病氣を愈さんと不動樣へお百度參り浮氣の願掛でおい事をくはしく話すと官員樣のお客がきかれて私しを稱め夫は感心お心掛是を纏頭お遣てくれと箝て居た指輪を外し夫を私しお下されたが大したものではあるまいと思ひの外なる身の儀倖今朝能く見れば金無垢にて殊に金剛石とかいふ珍しい石が彫込てあるゆゑ百圓以上の品と言れ默言ても居られねば旦那やお神さんお有のまゝ其お話しを申したら夫はお前が先頃中貞女の行狀ありたるゆゑ不動樣の御利益で不圖頂戴したのだから少しも早く亭主に見せて喜こばせろと言れたので二三日の暇を貰ひ泊り掛お來ましたと指輪取出し治兵衛に渡しさうもて是を下さつたお方は五百圓家の身給とお

お取あさる西郷樣とか被仰お方と聞て治兵衛も意外の歡喜お影て資本お有付た運の向ときは向くものゞ大坂より若糸がと浮染り言掛け我口を押へて暖ふ紛らす折しも暇をすれば腰障子ゐ影さす花の艶姿若糸は苟且の病氣に懼りて四五日以來枕ゐ就て居たりしも此頃漸やく全快せしゐ治兵衛方より打絶て音信なければ案じわび尋ね來りて門の戸を開て悔しき家内ゐは一人の女が睦しく勝手ばたらきする体は言ずとしれた治兵衛の情婦と物をも言ぜ飛び上り突然お政の胸倉把りお前は一体何處の女中かしらないがはる〳〵大坂から尋ねて來た私しのためゑ大切な良人を我物顔に家に入込せずとも能飯拵らへ早く歸つてもらひませうテモ厚皮な女中さんと悋氣の炎胸を焦しこゞき廻せばお政もまたれ前ころ何處からお出だ治兵衛さんは私しの亭主人の家へ理不尽に挨拶もせず入來るとは呆れ果た色狂人と互ひに爭ろふ蝸牛の角芽立たる戀爭ひい治兵衛は今更面目おく何と言解く術おさに只うろ〳〵と胡論付のみれ政は治兵衛の袂を捉へ涙の聲を震はしてお前は何て美くしい此女中と言契し私しを松本へ雇ひに出し其留守に引入て誰憚からず樂しむとはソリヤ胴慾お開ゑませぬ左樣とはしらず先頃中お前が長の煩らひゐト怨ずる傍から若糸も同じく聲を濕ませてこんなお内室さんを持ながら今日まで私しゐ告もせず隱しておくとは水臭いと左右より取縋り怨みつ泣つ搔口說く桃

と櫻の姉妹幼少き時に別れしまゝ逢見しことのあらざれば互ゐ夫と知るよしなくます〳〵募る鞘當の爭ろひ果てゐき折からヤア〳〵待たと門口より入來るは別人ならず則はち兄の良助ゐり長り狂ふ若糸を叱り付つゝお政ゐ向ひ絶て久しき妹お政よくマア無事で居てくれたと思ひ掛おき一言にお政を始め一坐の人々互に顔を打守り左右の詞もあらさりける

結局

登下お政は良助ゐ向かひ。足下は何處のお方やら數から棒ゐ身妾をば妹なりと被仰るは何いふ事由があるかは知らねど差し當りたる此場の始末私しの亭主をこの女中が大坂からの當い馴染だとて私しを突き出さうとする無法の悶着私しは治兵衛の妻お政と戸籍ゐ判然と載つて居ます虚ゐら區役所へ行て覽と疊み叩いて敦圖を左ろと思ふ良助は尚も詞を和らげて其腹立は尤もだが爭ろふ戀の相手の婦人も繋がる緣の姉妹とばかりゐては解るまい三人ともゐ落付て此良助が言事を篤と聞た其上て此納りをも付てやると諭し宥めて治兵衛に向ひ。先頃妹若糸が足下に逢たい一心で娼賣の中ゐも心を盡し金貯はへてはる〳〵と出京したを足下ゐは欣こびはせで迷惑がり又一つゐは活計のため寵をまとめて同居せんと相談ばかりは整のひしも事ゐ附托け猶豫ひたまふは

何か仔細のあるとと茲ふ始めて疑がひ起ゐ四五日前より若糸には家業に出るとと言做て此近所へ來て夫とはなしに問合せしに思ひきやお政と言る妻ありて操正しく本夫ゐ侍つき足下が病中云々の行狀ありしと聞からに父の遺言ゐ聞知りたる妹の名前も同じくれ政もしや夫にはあらざるかと懷かしくも幕はしく如何にもして其女と一眠ありとも見たく思ひ戀にはあらで松本の門邊を往つ又戻りつ垣間見せしも幾度か不圖お頭を見るゐ及び幼少き時別れしとゆゑ顏はさだかに覺へねど茲に居る若糸に似たとは思ゐ爪二つ割らでろのさゝ生寫し偖はと思へど明白ゑ告名掛んも流石ゐて如何ゐやせんと猶豫ふうち神の利益か亡親の導引ゐるか圖らぜも昨日の午後客を乘て新橋まで馳行つ空車ゐ挽て歸り道三十間堀ゐる狐鰻の門邊へ恰好かゝる時笑ひ動搖めき同家より客と戀妓と箱やせで三十人餘の大連が十七臺の腕車ゐ乘りお立といふ時出入の車夫が急場に臨みて二三名不足せしとて直ゐ頼まれ挽行く先は深川の松本と聞て好機會と心の中ゐ獨り歡こび頓て松本へ至りしにお客からのお指圖なりとて車夫一同を別間に通し酒肴の厚いゐ馳走素より飲ぬ口なれば席を外して一人の女中ゐお政の素性を能所ゐが尋ねた處ろ其女中がアノお政さんは四十二の二つ兒ゐりとて廷の上から親しちゐゐて他所へ遣られ深い仔細は覺ゑねぜ將の緒書ゐは松平播磨守の藩士五十嵐右膳娘ゑさと

記してゐれど今も尙實の父母同胞ともあるか無かも知れがたしとて思ひ出しては平生日頃折に觸ては涙ゐがらゐ妾し達ゑ話しますと聞た時の嬉しさは飛立つ程でありましたと言つゝ土瓶の温茶一と呑み乾く咽喉を濕ほして傍輩女中の話しにて偖はお政は吾妹に相違あらじと思ふ間よはやお立との供觸ゐ心は殘れど詮方ゐく又ろの客の一群を以前の狐鰻まで挽戻し同家を出て河岸通り再たび松本へ取て返しお政に逢て兄妹の名告をせんと急ぎ足歸り車と見て取る醉客吉原まで遣てくれと謠ひ込の二人連この時既に夜は更て十二時近くゐり響く八官町の大時計お政の事さへ氣ゐ掛れば强て否めど聞入ず祝義をやるから是非行けと言れて見れバ商賣冥利否とも云かね吉原ゐる仲の町の引手茶屋伊勢屋まで挽付しは昨夜の午前一時過ぎ是から八丁堀の我家まで空車を絞つて歸るより短夜ゐれば明去て行かんと大門口の片傍よケットを冠つて車の中結ぶは夢か幻ろしの現ともなく明渡る旭日の影に車の上を只見れば紫縮緬の服紗包さては昨夜の客人が置忘れし物ならんと松伊勢屋へ行て問て見たれど其客人の物でおいと言れてそんゐら狐鰻から松本まで上下の客の遺失れしゐ相違あらじと三十間堀へ今朝早く至りて聞は昨夜のお客が政事向に關係の大切の書物を何れへか遺失たとの大騷ぎ今日中に搜し出さねば由々しき大事と家内一同大心配の其中へ其品を届けたゆゑ狐鰻は大歡

びつりに頼んだ車夫さんが届けて呉るは正直者屹度礼禮を去ますからお前もどうぞ私しと同伴にろのお客のお邸へ行てくれろと頼まれて否とも言へず同家の内義さんを腕車に乗て品川のれ邸まで届けに行きしに謝義の印と五圓紙幣二枚もらつた意外の仕合夫より又お内室さんを腕車に載て三十間堀まで送り届け家業がらとは言ながら昨日出たまゝ歸らねば嘸や若糸が待詫つらんと八丁堀の家ゑ戻りしゐ若糸は家に在らぞ隣家で聞ば今しがたお前の歸りを待ち乘て深川まで行かれましたと聞と齊しく跡追掛け來りて見れば治兵衛さんを中ゐ隔ての姉妹互に夫と悋らねは角芽立たる繊爭ろひ血で血を洗ふは恥の恥と斯は仲裁に入たるなりと一伍一什の長物語聞より姉妹はワッとばかり姉さまか。妹かと爭ゐ手を取て抱し泣知らぬ申とは言ながら姉に對して勿体なひと詫れば姉も妹に對し一時のりん氣は許てと詫つ詫られ縁の糸の綾ゐ縺れし結び目の解てうれしき不思義の對面迭よ情郎を讀合ひいと美くしき爭ろひを兄良助は治兵衛と謀り若糸を本妻としお政を妾と両極て調ゝ納まる四面波三々九度の眞似事も兄妹三人水入らず治兵衛と改め抔させ喜後なゝ濟んるのち若糸が大坂より携さへ來りし百圓餘の金と併せてゐ政は又彼の人の[illegible]たる[illegible]百二十圓の金を得たる其上に良助が往來に[illegible]を嘉して待はへ[illegible]餘の餘財あり夫是合せて三百圓餘の大金を得た

りしかば知らぬ東京に彷徨て腕車を挽にも及ぶまじと後の事なを相談し去十五年の八月中治兵衛は若糸のお糸及びお政の姉妹を引連れ播州明石に移り住み搗米屋を開業し又良助は和田ヶ崎に別戸して或方より妻を迎へ一旦廢れし五十嵐の家を興して亡父の遺業を受繼ぎ呉服商を營なみ何れも家業ゐ出精せしかば富にはあらねど貧しからず行末頼母しく暮居るよし治兵衛の知己何某よりぞ〳〵報知ありたるまゝ長々しくも斯はものしつ五十嵐一家の盛衰榮枯兄妹四人の心の妍醜彼は刑場の露と消へ是は目出度局を結ぶ此冊子を讀む人々是彼合せて我が心の鏡ゑ照して味はひたまはば聊さか勸懲の端ともおらんか

善惡草孝手子鑑終

明治二十四年一月二日印刷
同年一月廿七日出版

編輯兼發行者　日吉堂　菅谷與吉
神田區佐久間町一丁目九番地

印刷者　龍雲堂　大塲沃美
同區柳原河岸第十一号地

版權所有

專賣店

本石町二丁目　上田屋榮三郎
淺草三好町　大川屋錠吉
横山町三丁目　辻岡文助
馬喰町三丁目　山口藤兵衛
通り四丁目　金櫻堂
仝　春陽堂
京橋區南紺屋町　井上勝五郎
小傳馬町三丁目　近江屋園吉

明治二十四年一月二日印刷
同年一月七日出版

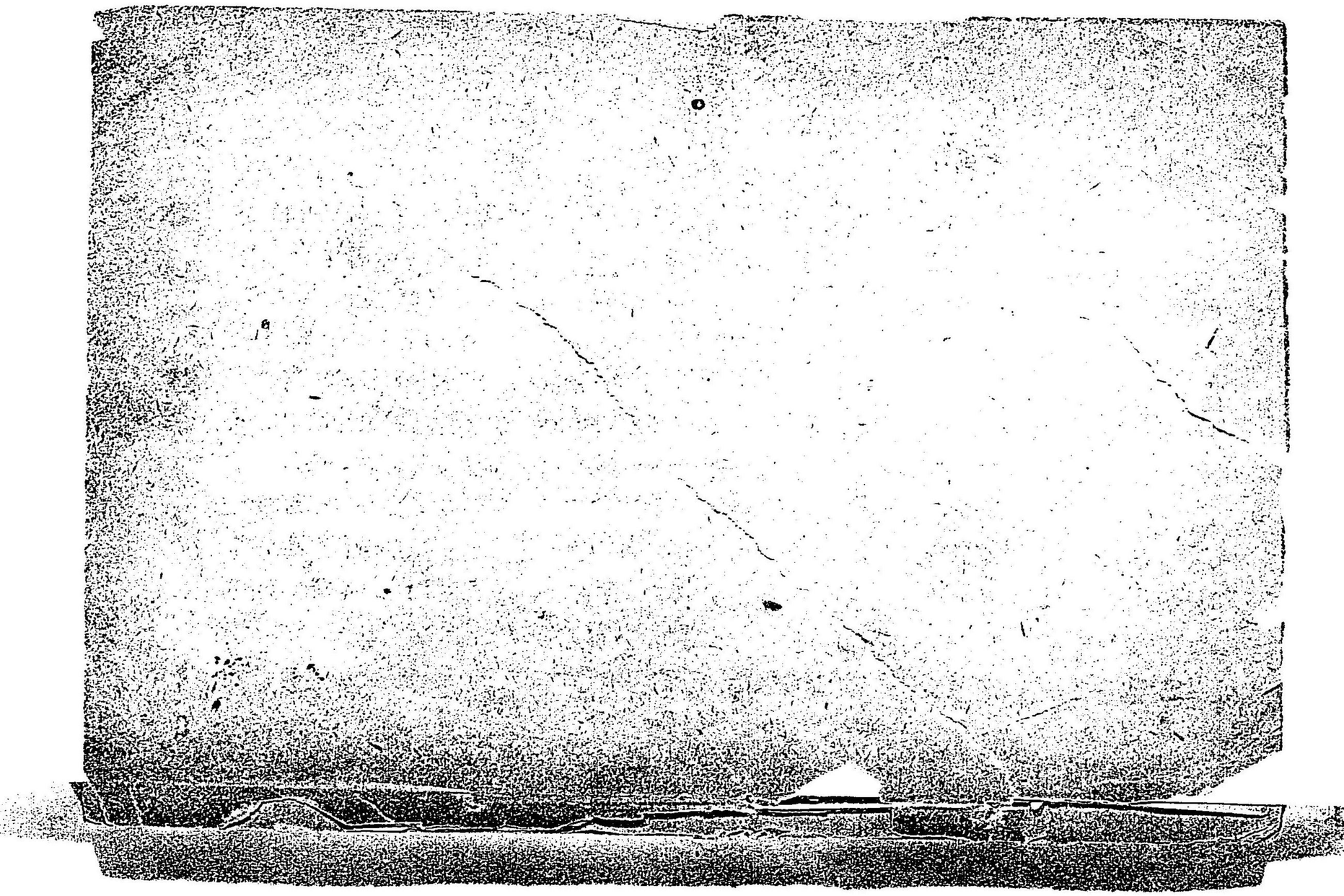
編輯兼發行者　日吉堂　菅谷與吉
神田區佐久間町一丁目九番地

印刷者　龍雲堂　大塲沃美
同區柳原河岸第十一号地

版權所有

專賣店

本石町二丁目　上田屋榮三郎
淺草三好町　大川屋錠吉
横山町三丁目　辻岡文助
馬喰町三丁目　山口藤兵衛
通り四丁目　金櫻堂
仝　春陽堂
京橋區南紺屋町　井上勝五郎
小傳馬町三丁目　近江屋園吉



特10
302

091530-000-8

特10-302

善悪草孝子手鑑

日吉堂

M24

DBN-2519